

II-2

Kalevala—叙事詩に祝日を捧げる国フィンランド

Oodi の taidematot のうち Tuonen hauki「死のカワカマス」は Kalevala をテーマにしています。その Kalevala は、医師であり、後には Helsinki 大学のフィンランド語教授ともなった Elias Lönnrot (1802-1884) が自ら蒐集した民間伝承詩をもとに編纂した叙事詩です。hauki「カワカマス」は、その Kalevala の中で何度か登場する重要な魚です。絨毯をデザインした Sakke Yrjölä さんは次のように語っています。

【1】カワカマスの別名は「水の犬」

Hauki on ollut myyttinen henkiolento jo esihistoriallisella ajalla maassamme. Mytologioissamme “ve’en koira” on liittynyt kuolemaan. Hauen uskottiin pystyvän kulkemaan kuolleiden ja elävien maailmojen väliä järven pohjan kautta “aliseen” Manalaan.

■ 語句・文法

tuoni「死」(この語から派生した語に tuonela「死者の国、冥界」があるが、tuoni 自体も「死者の国、冥界」という意味で使われることがある) / myyttinen「神話上の」 < myytti / henki-olento「精霊、超自然的な存在」 / mytologia「神話」 / ve’en = veden / ve’en koira = hauki「(学名: *Esox lucius*) カワカマス、ノーザンパイク」 / hauen uskottiin pystyvän「カワカマスはできると信じられていた」 [分構] (pystyvän 能現分 [属] < pystyä) / kuolleiden「死者たちの」 [複属] < kuollut 能過分 < kuolla / elävien「生者たちの」 [複属] < elävä 能現分 < elää / alinen「下の」 / Manala = Tuonela「冥界」

● フィンランド語理解のための訳例

カワカマスは神話上の霊的存在だった | すでに先史時代に | 我々の国では。我々の神話では「水の犬」は結びついてきた | 死と。カワカマスは信じられていた | 行き来できると | 死者の世界と生者の世界の間を | 湖の底を通過して | 「下にある」冥界へと。

◎ 意訳

我が国においてカワカマスは、すでに先史時代には神話上の超自然的存在とされていた。我々の神話においては、「水の犬」は死と結びついていた。カワカマスは死者と生者の世界の間を、湖底を通過して「下にある」冥界へと行き来することができると信じられていた。

★ 補足

tuoni は「死」という意味で、そこから派生したのが tuonela「冥界、死者の国」という単語です。tuoni はゲルマン系の借用語だそうです。ここで謝罪をしなければなりません。私はかつて tuonela は tuo「あれ、あの」から派生した単語だろうと思いついていました。日本語で「あの世」というようにフ

インランド語でも「あの世」というのだと思っており、そういう話を大学の授業でもしてしまいました。今さら謝罪のしようありませんが、非常に申し訳ないと思っています。

さて、この課では Kalevala が話題の中心となりますが、Kalevala そのものについては、日本語であれば次の文献が読みやすいと思います。

- 📖 キリスティ・マキネン（荒牧和子 訳）. 2005. 『カレワラ物語—フィンランドの国民叙事詩』春風社.
- 📖 マルツェティ・ハーヴィオ（坂井玲子 訳）. 2009. 『カレワラ タリナ』プレスポート.
- 📖 小泉保（翻訳）. 2008. 『カレワラ物語—フィンランドの神々』岩波少年文庫.

次に挙げるのは Kalevala そのものの翻訳です。

- 📖 『カレワラ(上)』『カレワラ(下)』（小泉保 訳）. 1976. 岩波文庫.

この書籍の解説部分はとても役に立つと思います。ただし Kalevala そのものを読むのは骨が折れます。というのも、Kalevala は kalevalamitta「カレワラ韻律」という形式に則って作られた民間伝承詩の形をとっているからです。

【2】カワカマスは理性と秩序に反する魚の始祖？

Hauki on merkittävyytensä perusteella kalojen johtaja. Veenkoirana tunnettu kala antoi ihmisille myyteissä tulen ja soiton. Hauki on kalevalainen järviseutujen kalaemuu. [...] Hauki tiedettiin myyttiseksi ja hirmuiseksi kalaksi. Haukea kohtaan tunnettiin kunnioitusta ja jopa pelkoa. Tässä kalassa koettiin jotain kaoottista, järjen ja järjestyksen vastaisuutta. Lisäksi hauki symboloi ahneutta, veenkoira kahmi suuhunsa pikkukaloja ahmatin tavoin.

■ 語句・文法

merkittävyytensä「その重要性の」[属]+ 単 3 所接 < merkittävyys < merkittävä 受現分 < merkitä / tunnettu「知られたような」受過分 < tuntea / soitto「音、演奏」/ kalevalainen「Kalevala の」/ kala-emuu「魚の始祖、魚の守護神」/ hirmuinen「おそろしい、ぞっとするような」< hirmu「怪物」/ kunnioitus「敬意」< kunnioittaa < kunnia / koettiin「感じた、経験した、出会った」受過 < kokea / kaoottinen「混沌とした、無秩序な、カオスの」/ järjen「理性の」[属] < järki / järjestyksen「秩序の」[属] < järjestys < järjestää < järki / vastaisuutta「逆、反対」[分] < vastaisuus < vastainen / symboloida「象徴する」/ ahneutta「貪欲さを」[分] < ahneus < ahne / kahmia「貪る」/ ahmatti「大食漢、大食らい」< ahma「クズリ(動物)」/ tavoin「方法で、~のように」[複具] < tapa

● フィンランド語理解のための訳例

カワカマスはその重要性にもとづき | 魚の指導者である。水の犬として知られる < その > 魚は与えた | 人間たちに | 神話の中で | 火と音を。カワカマスは Kalevala に登場する湖水地方の魚の始祖であ

る。[...]カワカマスは知られていた|神話上の恐ろしい魚だと。カワカマスに対して|感じられていた|敬意を|そして恐怖さえ。この魚の中に感じられていた|何か混沌とした、|理性と秩序の逆が。加えてカワカマスは象徴していた|貪欲さを、|水の犬は貪った|自らの口の中へ|小さな魚たちを|大食らいのように。

◎意訳

カワカマスはその重要性により、魚の中でもリーダー的な存在である。水の犬として知られるこの魚は、神話の中で人々に火と音を与えた。カワカマスは Kalevala に登場する、湖水地方の魚の始祖である。[...]カワカマスは神話上の恐ろしい魚として知られていた。カワカマスに対しては畏怖の念を抱き、恐怖心すら感じていた。この魚の中に、人は何か混沌とした、理性と秩序に反するようなものを感じていた。加えて、カワカマスは貪欲さを象徴してもおり、この水の犬は大食らいのクズリのように小魚たちを貪り食った。

【3】Väinämöinen はカワカマスの顎骨からカンテレを手に入れる

Taikamenoissa hauen luilla, erityisesti päälluilla, oli suuri merkitys. Väinämöinen sai hauen leukaluista kaunissointisen kanteleen, henkisen rikkauden lähteen.

■語句・文法

taika-menot「魔術の儀式」(「儀式」という意味での meno はふつう複数形で使います) / luilla「骨には」[複接] < luu / Väinämöinen は Kalevala の主人公 / leuka-luista「顎骨から」[複出] < -luu / kaunis-sointinen「美しい音色の」(sointinen < sointi < soida) / kanteleen「カンテレの」[属対] < kantele (お琴のような民族楽器) / lähteen「源を」[属対] < lähde ⇒ lähteä

●フィンランド語理解のための訳例

呪術的な儀式において|カワカマスの骨には、|とくに頭の骨には|大きな意味があった。Väinämöinen は得た|カワカマスの顎骨から|美しい音色のカンテレを、|精神的豊さの源を。

◎意訳

呪術的な儀式においてカワカマスの骨には重要な意味があり、とくに頭の骨はそうだった。Kalevala の主人公である Väinämöinen も、カワカマスの顎骨から美しい音色を放つカンテレを手に入れることができたが、それは精神的な豊さの源泉でもあった。

【4】Kalevala が最初に出版されたのは 1835 年

Kalevalan käsikirjoitus oli valmiina alkuvuodesta 1835. Esipuheensa Elias Lönnrot päiväsi 28. helmikuuta 1835. Päivää vietetään nykyisin Kalevalan ja suomalaisen kulttuurin päivänä.

■語句・文法

käsi-kirjoitus「原稿」 / alku-vuodesta「年の初めに」[出] < -vuosi / esi-puhe「前書き、序論」 /

päivätä「日付をつける」< päivä/vietetään「祝われる」受現 < viettää

●フィンランド語理解のための訳例

Kalevala の原稿はできあがっていた|1835 年の初めに。序文において|Elias Lönnrot は日付を記している|1835 年 2 月 28 日と。この日は祝われている|現在では|Kalevala とフィンランド文化の日として。

◎意訳

Kalevala の原稿は 1835 年の初めに完成していた。その序文において Elias Lönnrot は、1835 年 2 月 28 日と日付を記している。現在では、この日は「Kalevala とフィンランド文化の日」として祝われている。

【5】2 月 28 日は Kalevala の日でもありフィンランド文化の日でもある

On ainutlaatuista maailmassa, että kansalliseepokselle on omistettu virallinen kansallinen juhlapäivä. Kun Kalevalan päivä virallistettiin liputuspäiväksi, se vahvistettiin asetuksella suomalaisen kulttuurin päiväksi. Näin Kalevala valtion toimesta määritettiin ja vahvistettiin suomalaisen kulttuurin keskeistuotteeksi ja -symboliksi.

■語句・文法

ainut-laatuinen「独特な」/kansallis-eepos「民族叙事詩、国民叙事詩」/on omistettu「捧げられている」受完 < omistaa/virallinen「公式の、公的な」< virka/kansallinen「民族的な、国民的な、国家の」(13 ページの「★補足」を参考にしてください) /virallistettiin「公式化された」受過 < virallistaa < virallinen/liputus「旗を掲揚すること」< liputtaa < lippu/vahvistettiin「確認された、承認された」受過 < vahvistaa, vahva/asetuksella「政令により」[接]< asetus/määritettiin「明確にされた、特定された」受過 < määrittää < määrä/keskeis- < keskeinen「中心的な」/tuotteeksi「産物だと」[変]< tuote < tuottaa/なお、1835 年 2 月 28 日は、編者である Elias Lönnrot が Kalevala 初版の前書きで署名している日付

●フィンランド語理解のための訳例

世界でも独特なことだ、|[民族叙事詩に捧げられていることは|公式の国家レベルの祝日が]。Kalevala の日が正式に国旗を掲揚する日とされたとき|[それは政令で承認された|フィンランド文化の日として]。こうして Kalevala は国家の措置により決定され確認された|フィンランド文化の中心となる産物であると|そして、象徴であると。

◎意訳

民族叙事詩が国家レベルで公式な祝日を与えられているのは世界でも独特なことだ。Kalevala の日が公的に旗日とされた際には、それは政令により「フィンランド文化の日」として承認された。こうして Kalevala は国家の措置により、フィンランド文化の中心的作品として、そしてフィンランド文化の

象徴として明確に承認されたのである。

★補足

juhla-päivä はそのまま訳せば「祝日」になるだろうと思います。ただし、日本では祝日はふつう休日になると考えられていますが、フィンランドにおいては必ずしもそうではありません。また、pyhä-päivä は Kielitoimiston sanakirja (<https://www.kielitoimistonsanakirja.fi/#/>) では次のように説明されています。

pyhäpäivä: sunnuntai tai kirkollinen juhlapäivä「日曜日、あるいは教会の祝日」

したがって、pyhä-päivä はどちらかと言えば「祭日」に相当するでしょうか。さらに、フィンランド内務省のホームページ (<https://intermin.fi/suomen-lippu/liputuspaivat>) によれば、2023 年の liputus-päivä「旗日、国旗を掲揚する日」は次の通りです（ちなみに、フィンランド語では日付は「日・月」の順で示すことが多いので、たとえば 3.2.は「2 月 3 日」のことです）。liputus-päivä にも政令によって定められたもの、政令によってではないものの慣習として定着しているもの、さらに「国旗を掲揚することが推奨されている日」など何種類かあるようです。

Helmikuu

3.2. Alvar ja Aino Aallon sekä suomalaisen arkkitehtuurin ja muotoilun päivä | suositeltu liputus
「Alvar と Aino Aalto、そしてフィンランド建築とデザインの日」| 掲揚が推奨される

5.2. J.L. Runebergin päivä
「J.L. Runeberg の日」

6.2. Saamelaisten kansallispäivä | suositeltu liputus
「サーミ人たちの民族の日」| 掲揚が推奨される

28.2. Kalevalan päivä, suomalaisen kulttuurin päivä
「Kalevala の日、フィンランド文化の日」

Maaliskuu

19.3. Minna Canthin päivä, tasa-arvon päivä
「Minna Canth の日、男女平等の日」

Huhtikuu

2.4. Eduskuntavaalit
「国会選挙」

8.4. Romanien kansallispäivä | suositeltu liputus
「ロマ人たちの民族の日」| 掲揚が推奨される

9.4. Mikael Agricolan päivä, suomen kielen päivä
「Mikael Agricola の日、フィンランド語の日」

27.4. Kansallinen veteraanipäivä
「国家退役軍人の日」

Toukokuu

1.5. Vappu, suomalaisen työn päivä
「Vappu、フィンランドの労働の日」

9.5. Eurooppa-päivä

「欧州の日」

12.5. J.V. Snellmanin päivä, suomalaisuuden päivä

「J.V. Snellman の日、フィンランド人であることの日」

14.5. Äitienpäivä

「母の日」

21.5. Kaatuneitten muistopäivä

「戦没者追悼記念日」

Kesäkuu

4.6. Puolustusvoimain lippujuhlan päivä

「国防軍旗の日」

24.6. Juhannus, Suomen lipun päivä

「夏至、フィンランド国旗の日」

Heinäkuu

6.7. Eino Leinon päivä, runon ja suven päivä

「Eino Leino の日、詩と夏の日」

Elokuu

9.8. Tove Janssonin ja suomalaisen taiteen päivä | suositeltu liputus

「Tove Jansson とフィンランド芸術の日」| 掲揚が推奨される

26.8. Suomen luonnon päivä

「フィンランド自然の日」

Lokakuu

1.10. Miina Sillanpään ja kansalaisvaikuttamisen päivä

「Miina Sillanpää と国民が影響を与えることの日」

10.10. Aleksis Kiven päivä, suomalaisen kirjallisuuden päivä

「Aleksis Kivi の日、フィンランド文学の日」

24.10. YK:n päivä

「国際連合の日」

Marraskuu

6.11. Ruotsalaisuuden päivä, Kustaa Aadolfin päivä

「スウェーデン語系の日、Kustaa Aadolf の日」

12.11. Isänpäivä

「父の日」

20.11. Lapsen oikeuksien päivä

「子どもの権利の日」

Joulukuu

6.12. Itsenäisyyspäivä

「独立記念日」

8.12. Jean Sibeliusen päivä, suomalaisen musiikin päivä

「Jean Sibelius の日、フィンランド音楽の日」

J.V. Snellman については、『フィンランド語の世界を読む』14 課や 18 課で少し触れましたし、14 課

には少しだけですが J.L. Runeberg も登場しています。そして、Sibelius についても 14 課で取り上げましたし、Alvar Aalto については 15 課で扱いました。加えて、Eino Leino についても、彼の詩の一部を 8 課で読みました。また、Manna Canth と Tove Jansson、そして Aleksis Kivi については、それぞれの資料をこのサイトに掲載する予定です。

【6】1849 年に出版された Uusi Kalevalaこそ、フィンランド人たちが知っている Kalevala

Runoaineiston yhä karttuessa Lönnrot alkoi työstää Kalevalasta uutta, laajempaa versiota. Tämä vuonna 1849 ilmestynyt Kalevala on se, jota suomalaiset ovat tottuneet kansalliseepoksenaan lukemaan.

■ 語句・文法

aineisto 「材料、題材、資料」 < aine / yhä 「さらに」 / karttuessa 「成長するときに」 e 不 [内] [時構]
< karttua / työstää 「加工する、仕上げる」 / laajempaa 「より広い」 [分] < laajempi 比 < laaja / versio 「版、バージョン」 / ilmestynyt 「刊行されたような」 能過分 < ilmestyä / kansalliseepoksenaan 「自分たちの民族叙事詩として」 [様]+ 複 3 所接 < -eepos

● フィンランド語理解のための訳例

詩の資料がさらに増えたときに | Lönnrot は仕上げ始めた | Kalevala から | 新しい、より広いバージョンを。この | 1849 年に刊行された Kalevala がそれである、 | それをフィンランド人たちは慣れている | 自分たちの民族叙事詩として | 読むことに。

◎ 意識

民間伝承詩の資料が蓄積される中で、Lönnrot は新しい、そしてより充実した Kalevala の新版の完成に取りかかった。1849 年に出版されたこの Kalevala こそ、フィンランド人たちが自分たちの民族叙事詩として読み慣れたものなのである。

★ 補足

1835 年に出版されたものを Vanha Kalevala、そして 1849 年に刊行されたものを Uusi Kalevala と呼びますが、現在 Kalevala として読まれているのは後者です。さて、それでは Kalevala のもとになったとされる民間伝承詩はどこで収集されたのでしょうか。

【7】Kalevala のもとになった民間伝承詩は Karjala のもの

Kalevalan ensimmäinen laitos, ns. Vanha Kalevala (1835) perustuu pääosin vienankarjalaiseen aineistoon, mutta kansalliseepoksen aseman saanut Uusi Kalevala (1849) on lähde pohjaltaan paljon laveampi; sen aineistona on karjalaisia, suomalaisia ja inkeriläisiä runoja. Kalevalan aineistosta keskeinen osa on kerätty karjalaisilta, mutta Kalevalan saatua Suomessa merkittävän kansallisen aseman eepos on esitetty suomalaisena kulttuurina [...].

■語句・文法

laitos「版」= versio/ns. = niin sanottu「いわゆる」/pää-osin「おもに」[複具]<-osa/vienan-karjalainen「ビエナ・カレリア(語)の、白海カレリア(語)の」(次の「★補足」を参照)/saanut「手に入れたような」能過分 < saada/lähde-pohjaltaan「その出典となったものからすれば」[奪]+ 単3 所接 <-pohja (lähde「源、情報源、出典」、pohja「底、基盤」)/laveampi「より広い」比 < lavea = laaja/inkeriläinen「イングリアの、イジョラの、イジョールの」(次の「★補足」を参照)/on kerätty「蒐集された」受完 < kerätä/Kalevalan saatua Suomessa merkittävän kansallisen aseman「Kalevala がフィンランドにおいて重要な民族的地位を獲得した後では」(saatua「得た後で」)e 不[内][時構] < saada)/on esitetty「提示されてきた」受完 < esittää

●フィンランド語理解のための訳例

Kalevala の初版、いわゆる Vanha Kalevala (1835 年) はもとづく|おもに|ビエナ・カレリア地方の資料に、|しかし民族叙事詩の地位を手に入れた Uusi Kalevala (1849 年) は|資料の出所の点では|ずっと広いものである;|その資料となったのはカレリアの、フィンランドの、そしてイングリアの詩であった。Kalevala の資料の中心的部分は|集められた|カレリア人たちから、|しかし[Kalevala が得た後で|フィンランドにおいて|重要な民族的くなものとしての]地位を]|その叙事詩は提示された|フィンランドの文化として。

◎意訳

Kalevala の初版である、いわゆる Vanha Kalevala『古カレワラ』(1835 年) は、おもにビエナ・カレリア地方の資料にもとづいているが、民族叙事詩としての地位を獲得した Uusi Kalevala『新カレワラ』(1849 年) は、その資料の出どころという点でははるかに幅広いものとなっている;つまり、カレリア、フィンランド、イングリアの詩が資料となっている。Kalevala の資料の中心となるものはカレリア人から収集されたものだが、Kalevala がフィンランドにおいて民族的なものとして重要な地位を獲得すると、叙事詩はフィンランド文化に属するものとして提示されることになった。

★補足

Karjala「カレリア」はフィンランド南東部からロシア北西部へと広がる地域のことです。1323年に当時のスウェーデンとノブゴロド公国との間で結ばれた Pähkinä-saari 条約により、Karjala の地域は二つの国に分断されることになりました。その Karjala はいくつかの地域・文化に分けられますが、この【7】の文章に出てくる Vienan Karjala は Vienan-meri「白海」というバレンツ海へとつながる湾の西側の地域をさします。また Inkeri(あるいは Inkerin-maa) は、現在では Pietari(サンクトペテルブルク)に属す地域ですが、伝統的にフィンランド語と近い関係にある言語が話されてきた地域でもあります。

【8】Kalevala のだいたいのあらすじは？

Kalevalan juoni on varsin monisäikeinen, ja se sisältää hyvin monia eri tapahtumia ja hahmoja, mutta yleisesti teoksen voidaan sanoa käsittelevän ennen kaikkea Väinämöisen matkoja, joilla hän hakee itselleen kumppania, sekä taianomaisen Sammon ryöstöä.

■ 語句・文法

juoni「あらすじ」／moni-säikeinen「複雑な」(säie「糸に紡ぐ繊維」)／teoksen voidaan sanoa käsittelevän「作品は扱っていると言える」[分構](teoksen[属]< teos, käsittelevän 能現分[属]< käsitellä)／ennen kaikkea「なかでも」／kumppania「伴侶を」[分]< kumppani／taianomainen「魔法の(ような)」< taika／Sampo「サンポ(富を生み出す魔法の器で、鍛冶である Ilmarinen が 鑄造、次の「★補足」を参照)／ryöstö「強奪」< ryöstää

● フィンランド語理解のための訳例

Kalevala のあらすじはとても複雑だ、|そして、それは含む|非常に多くの異なるできごとや登場人物たちを、|しかし一般的に作品は言える|扱っていると|何よりも|[Väinämöinen の旅を、|その旅で彼は探す|自分自身のために|伴侶を]、|そして魔法の Sampo の強奪を。

◎ 意訳

Kalevala のあらすじは非常に複雑であり、それは非常に多くのさまざまなできごとや人物を含んでいる。しかし、一般的に Kalevala という作品は、何よりも自らの伴侶を探し求める Väinämöinen の旅を、そして魔法の Sampo の強奪を扱っているといえる。

★ 補足

sampo とは Kalevala に登場する富を生み出す器とされますが、それがどのようなものかについては多くの議論があるようです。なお、後に紹介する Akseli Gallen-Kallela の作品の中にも Sammon taonta「sampo の鍛造」という題名の絵があり、鍛冶である Ilmarinen が sampo を制作している様子が描かれています。なお、sampo は企業名などにも採用されてきた歴史があり、『フィンランド語の世界を読む』8 課に登場した Heikki Niska さんの詩にもあるように、砕氷船の名前としても知られています。

【9】Kalevala の登場人物たちは？

Kalevalassa esiintyviä keskeisimpiä hahmoja ovat tietenkin vanha ja viisas Väinämöinen, jolla on yliluonnollinen alkuperä, ja joka taitaa kanteleensoiton paremmin kuin kukaan muu. Seppo Ilmarinen on tarinan sankarillinen seppä, joka nikkaroi taivaan valtakunnan, Sammon ja paljon muutakin. Lisäksi Ilmarinen on yksi niistä monista, jotka osallistuvat Kalevalassa Sammon ryöstöön. Louhi on pohjoisen valtiias, joka on niin voimakas, että hän pystyy vetämään niin auringon kuin kuunkin taivaalta. Hän lupaa tyttärensä seppä Ilmariselle, joka suostuu vastalahjaksi

rakentamaan hänelle Sammon. Hahmoja vilisee Kalevalassa kymmeniä, mutta nämä kolme lienevät eräitä tapahtumien kannalta kaikkein keskeisimmistä hahmoista Joukahaisen, Kullervon, Lemminkäisen ja Ainon ohella.

■ 語句・文法

esiintyviä「登場するような」能現分[複分] < esiintyä / keskeisimpiä「もっとも中心的な」[複分] < keskeisin 最 < keskeinen / yli-luonnollinen「超自然的な」< luonnollinen < luonto / alku-perä「出自、起源」 / kanteleen-soitto「カンテレ演奏」(soitto < soittaa) / seppo = seppä「鍛冶」(seppo は詩語) / nikkaroida「(家具などを)作る、大工仕事をする」 / taivaan valta-kunta「天国、神の国」 / valtias「支配者、王」< valta / suostua「同意する」 / vasta-lahjaksi「お返しの贈り物として」[変]< -lahja / vilistä「(多くの人)動き回る」 / lienevät「～であるかもしれない」[可]複 3 < olla / kaikkein「すべての中で」< kaikki / keskeisimmistä「もっとも中心的な」[複出]< keskeisin 最 < keskeinen

● フィンランド語理解のための訳例

Kalevala に登場する中心的な人物(の一人)はもちろん年を取った賢い Väinämöinen だ、|彼には超自然的な出自がある、|そして彼はできる|カンテレ演奏が|ほかの誰よりもうまく。Seppo Ilmarinen は物語の英雄的な鍛冶屋だ、|彼は創る|天国を|Sampo を、そして多くのほかの物を。加えて Ilmarinen は多くのうちの一人だ、|彼らは Kalevala で Sampo の強奪に参加する。Louhi は北の支配者だ、|彼女はとても力強い|ので、引きずり下ろすことができる|太陽も月も空から。彼女は約束する|自分の娘を鍛冶屋の Ilmarinen へ(与えると)、|その Ilmarinen は同意する|お返しとして|作ることを|彼女に Sampo を。登場人物は動き回る|Kalevala の中で何十人も、|しかし、この3人がいくつかのできごとの観点からは|すべての<登場人物の>中でもっとも中心的な登場人物かもしれない|Joukahainen、Kullervo、Lemminkäinen、そして Aino と並んで。

◎ 意訳

Kalevala に登場するもっとも中心的な登場人物というのは、もちろん年寄りで賢明な Väinämöinen であるが、彼は超自然的な出自をもち、他の誰よりカンテレを上手に演奏することができる。Seppo Ilmarinen は物語の中では英雄的な鍛冶であり、天の国、Sampo、そして他にも多くのものを創り出す。さらに、Ilmarinen は Kalevala において Sampo の強奪に加わる多くの者たちのうちの一人でもある。Louhi は北の支配者であり、天空から太陽でも月でも引きずり下ろすほどの力を持っている。彼女は自らの娘を Seppo Ilmarinen に与えると約束し、Ilmarinen は返礼として彼女に Sampo を造ることに同意するのである。Kalevala においては数十名の登場人物たちが動き回るが、Joukahainen、Kullervo、Lemminkäinen、そして Aino と並んで、いくつかのできごとの観点からすると、ここで紹介した3名がすべての中でもっとも中心的な登場人物であるかもしれない。

★ 補足

文章に出てきた登場人物について、ごく簡単に説明しておきます。

👤 Joukahainen は Väinämöinen に闘いを挑みますが、歌の戦いで負け妹の Aino を与えると約束します。その後、Aino は Väinämöinen と結ばれることを嫌い入水自殺をしてしまいます。それに怒った Joukahainen は Väinämöinen をクロスボウ(ボーガン)で射ち、そのため Väinämöinen は海に落ちてしまいます。

👤 Kullervo は悲劇的な、そして感情の激しい登場人物です。結ばれた女が妹だと分かりますが、妹は急流に飛びこみ、Kullervo 自身は戦いへ出かけやはり自ら命を絶ちます。

👤 Lemminkäinen を表す言葉は「女性好き」と「戦争好き」でしょうか。北の国 Pohjola の主 Louhi の娘を手に入れようとして命を落としますが、母親が彼を生き返らせます。Sibelius の作品『レンミンカイネン組曲』も有名ですし、後で紹介する Gallen-Kallela の絵もよく知られています。

👤 Aino は Joukahainen の妹ですが、Väinämöinen の妻になることを拒み入水自殺をします。なお Aino という女性名は Kalevala において ainoa「唯一の」という語から作られたもののようです。Kalevala に登場する Aino も、最初は Joukahainen ainoa sisar「Joukahainen のただ一人の妹」と表現されていたようです。その後、Aino は女性名として定着し、もっとも人気のある女性名となったこともあるそうです。フィンランドには nimi-päivä というものがあり、カレンダーを見ると、それぞれの日に名前が記されています。たとえば、Eevaさんと Aatamiさんの nimi-päivä は12月24日となっています(Aatamiは「アダム」さん、Eevaは「イブ」さんに相当するので「アダムとイブ」というわけです)。そして、Ainoの nimi-päivä は5月10日となっています。

なお、文章の中にも出てきた Louhi「ロウヒ」ですが、この名前が書名に入った次のような翻訳書が日本で出版されています。

📖 アイリ・ネノラ／センニ・ティモネン(目莞ゆみ 訳). 2003.『ロウヒのことは—フィンランド女性の視覚からみた民俗学(上・下)』文理閣.

さて、【1】の「★補足」の中で挙げた日本語で読める文献で Kalevala がどのような話なのかを見ていただくとよいでしょう。それに加えて、インターネットを利用できる方は、たとえば次のページで、Akseli Gallen-Kallela という画家が Kalevala を題材に描いた絵を見ていただくとよいと思います。

松村一登. Gallen-Kallela の描く「カレワラ」:

http://www.kmatsum.info/lec/hongo/suomi/Gallen_Kallela/index.html

さて、それでは民族叙事詩とはそもそも何なのかについて見ていきましょう。

【10】民族叙事詩とはいったい何なのか？

Kansalliseepoksella tarkoitetaan kansakunnan tai etnisen ryhmän symboliksi nostettua eeposta, jonka olemassaolon ja merkityksen katsotaan toimivan kansakunnan tai etnisen ryhmän jäseniä yhdistävänä tekijänä ja joka omalla olemassaolollaan toimii merkinä jäsenten ajattelusta yhteenkuuluvuudesta

esimerkiksi poliittisessa, kulttuurisessa ja/tai biologisessa mielessä. Kansalliseepoksen sisällön voidaan myös uskoa kuvastavan kansan ja kansakunnan ”henkeä” – sielua, olemusta, luonnetta – tai sille yhteistä eetosta, maailmankuvaa, historiaa ja kohtaloa. Tällöin kansalliseepoksen sankarit ovat kansallisen tai etnisen yksikön ja sen yhtenäisyyttä ilmentävän eetoksen alkuperäisiä sankareita, ja myöhempien sankareiden prototyyppejä.

■ 語句・文法

kansa-kunta「ネーション、民族、国家」／nostettua「高められたような」受過分[分] < nostaa／olemassa-olon ja merkityksen katsotaan toimivan「存在と意味は機能するとみなされる」[分構] (toimivan 能現分[属] < toimia)／jäseniä yhdistävänä tekijänä「メンバーたちを結びつける要因として」(yhdistävänä 能現分[様] < yhdistää < yksi)／omalla olemassa-olollaan「自らの存在によって」(olemassa-olollaan [接] + 単 3 所接 < -olo)／jäsenten ajatellusta yhteenkuuluvuudesta「メンバーたちの考えられた〈想像上の〉結束について」(ajatellusta 受過分[出] < ajatella)／yhteenkuuluvuus「結束、一体感、一つであること」(yhteen[入] < yksi, kuuluvuus < kuuluva 能現分 < kuulla)／sisällön voidaan myös uskoa kuvastavan「内容はまた反映するのだと信じることができる」[分構] (sisällön[属] < sisältö sisältää < sisä, kuvastavan 能現分[属] < kuvastaa < kuva)／olemus「姿、本質、特徴」< olla／eetos「エートス(ここでは、集団を特徴づけるような価値観や慣習などの全体のこと)／maa-ilman-kuva「世界観」／sen yhtenäisyyttä ilmentävän eetoksen「その一体性を表現するエートスの」(yhtenäisyys「一体性」／proto-tyyppi「プロトタイプ、原型」

● フィンランド語理解のための訳例

民族叙事詩<という言葉により>[意味する|ネーション、あるいは民族集団の象徴に高められたような叙事詩を]、|その存在と意味はみなされる|[機能すると|ネーション、あるいは民族集団のメンバーを結びつける要因として]|そして、それは自らの存在により機能する|[印として|メンバーたちの考えられる結束についての]|たとえば政治的、文化的、そして／あるいは生物学的な意味における]。民族叙事詩の内容は|[また信じることができる|映し出していると|民族やネーションの「精神」を-魂を、本質的な姿を、性格を-|あるいは、それに共通のエートスを、|世界観を、歴史を、そして運命を]。このとき|民族叙事詩の英雄たちは|国家的、あるいは民族的単位と|その一体性を表すエートスの本来の英雄たちである|そして、後の英雄たちの原型である。

◎ 意訳

民族叙事詩という表現によって意味されるのは、ネーションや民族集団の象徴へと高められた叙事詩のことである。そして、その存在と意義はネーションや民族集団の構成員を結びつける要因として機能し、また、その存在により、たとえば政治的、文化的、生物学的な意味における構成員たちの想像上の結束を表すものとして機能するのである。叙事詩の内容はまた、民族やネーションの「精神」、すなわち魂、本質、性格、あるいはエートス、世界観、歴史、そして運命を反映しているのだと考

えることもできるのである。この場合、民族叙事詩の英雄たちは国家的、あるいは民族的な単位と、その一体性を表すエートスを具現化した本来の英雄であり、また後の時代の英雄たちの原型となるものなのである。

★補足

実は kansallinen という語をどのような日本語に訳すべきなのか頭を悩ませています。候補としては「民族的な」「国民的な」などがありますが、これらの日本語の意味するところにはかなり大きな違いある気がします。あるいは【10】に出てくる kansa-kunta も「国民、民族」などと訳されますが、その意味を明確に伝えきれないためか、kansa-kunta に相当する英語の nation を「ネーション」とカタカナ書きにすることが多いようです。同じく kansallis-valtio も「民族国家、国民国家」と並んで、英語をカタカナ書きにした「ネーション・ステート」などと訳されます。とにかく kansa や kansa-kunta、「そして nation という語の理解は難しいのですが、それは当たり前だと思った方がよいでしょう。

nation「ネーション」について有名なのはアンダーソンという研究者の「想像の共同体」という言葉です。そもそも「ネーション」という概念は 1800 年代頃に生まれたもので、けっして昔からあるものではありません（ですから、たとえば「中世の日本国民は」などと言うことは、本当は大きな問題があることになります）。それ以前は、共同体とは顔見知りの人々との結びつきだったのに対して、ネーションという場合には、出会ったこともない人々との結びつきが大きな意味をもつようになりました。このあたりを考えると Kalevala が作り出そうとした「フィンランド人たちの一体感」というものはまさに「ネーション」としての一体感であり、しかも Kalevala というものを媒体に構築される「想像」上の一体感であることが理解できるような気がします。このように、フィンランドの 1800 年代の動きを見ると、確かに nation というものは「想像」の産物として築き上げられるものだという気がします。

+++++

あくまでも参考までですが、問題となっている語について、Kielitoimiston sanakirja における語釈を挙げてみます。

§ kansa

1. kulttuuriltaan ja us. myös hallinnoltaan ja kieleltään yhteen kuuluva ihmisryhmä; jnk valtion väestö.

文化の点からして、そしてしばしば統治や言語の観点から一つに属する人間集団；いずれかの国家の人口。（us. = usein、jnk = jonkin [属] < jokin）

2. jnk seudun asukkaat, asujaimisto, väki.
どこかの地域の住民たち、住民集団、人々。

3. maalaisväestö, työväki, alemmat yhteiskuntaluokat, rahvas.
地方の人々、労働者、下層階級、民衆。

4. epäluukuinen, suuri ihmisjoukko, väki, yleisö, ihmiset.
不特定多数の人間集団、民衆、大衆、人々。

§ kansa-kunta

vars. verraten korkealla sivistystasolla olevista, tav. myös valtiollisesti itsenäisistä kansoista.
とりわけ比較的高度な文明レベルにあるような、ふつうは国家的にも独立している kansa についてく使われる。 (vars. = varsinkin, tav. = tavallisesti)

kansa-kunta は英語の nation に相当する語です。「国際連合」のことを英語では United Nations と言いますが、フィンランド語でも Yhdistyneet kansakunnat となり、やはり英語の nation に kansa-kunta が対応しています。直訳すれば「連合した nation たち」ですが、この場合の nation には「国家」あるいは「国民」という日本語がもっともよく対応すると考えることもできます。ちなみに、Yhdistyneet kansakunnat の語釈は次の通りです。

§ Yhdistyneet kansakunnat (lyhenne: YK)

toisen maailmansodan jälkeen perustettu itsenäisten valtioiden turvallisuus- ja yhteistyöjärjestö.
第二次世界大戦後に設立された、独立した国家による安全保障と協力のための組織。

ここでは明確に valtioiden 「国家の」という語が説明で使われています。

以上のことを見ても、フィンランド語の kansa はどちらかというと文化的な意味における集団を、そして kansa-kunta の方は政治的な意味における集団をさすような気がします。

§ kansallinen

jillek kansalle (erityisesti) ominainen; omaan kansaan perustuva t. kohdistuva t. sitä koskeva; kansallismielinen; vain omaa kansaa t. valtiota koskeva (kansainvälisen vastakohtana); kansallisuutta koskeva.

ある kansa に(とくに)特徴的な; 自らの kansa にもとづくような、あるいは向けられるような、あるいは、それに関わるような; 民族主義的な; 自らの kansa だけに、あるいは自らの国家だけに関するような(「国際的な」という語の反意語); 民族〈国籍〉に関するような (jillek = jollekin)

この中では最初と 2 番目の語釈はおもに「民族的な」という日本語に相当するようになります。それに対して 4 つ目の語釈では、とくに「国際的な」という語の反意語として、「国家的な」や「国内の」、あるいは「国立の」といった日本語に相当するようになります。

§ kansallis-valtio

valtio jonka asukkaat ovat enimmäkseen samaa kansallisuutta.
その住民たちがだいたいにおいて同じ民族であるような国家。

kansallis-valtio に相当する英語は nation state だと思いますが、この語は多くの場合「国民国家」

と訳されています。もちろん「ネーション・ステート」という言い方を使う人もいますが、「民族国家」という言い方をする人は少ないようです。

+++++

以上、非常に難しいのですが、フィンランドは 1809 年にスウェーデンからロシアの支配下へ移ると、独自の kansa、そして kansa-kunta としての自覚を高める動きが活発化することになります。言い換えれば、「ナショナリズム」と呼べるかもしれない考え方が力をもつようになります。「ナショナリズム」ですが、これももちろん 1800 年代以降に生まれた新しい考え方だとみなすべきでしょう。「ナショナリズム」はなんとなく危険なものだと考えられることが多いようですが、それでは「ナショナリズム」とは何なのでしょう。これも、もちろん非常に難しい問題ですが、有名なのはゲルナーという人の定義です。ゲルナーによれば、ナショナリズムとは政治的な単位と民族的・文化的な単位とが一致すべきだとする考え方だということになります。民族というまとまりを示す文化的側面の代表的なものが「言語」ですので、ナショナリズムは「同じ言語を話す一つの民族が国家をもつ国民となるべきだ」というように解釈することもできるかもしれません。

1809 年にフィンランドはスウェーデンからロシアの支配下へ移り、同時にヨーロッパでは「ナショナリズム」という考え方が力を得た中で、フィンランドにおいても「フィンランド語」という言語を共有する「フィンランド人」たちが「フィンランド民族」としてのまとまりを自覚し、kansakunta としての「フィンランド」を構築することが必要だという流れになったと考えることができます。そのような流れの中で生み出されたものの一つが Kalevala だったのでしょう。

ナショナリズムに関して「古典」とされる書籍を紹介しておきます。

- ベネディクト・アンダーソン（白石隆・白石さや 訳）. 2007. 『定本 創造の共同体—ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山.
- アーネスト・ゲルナー（加藤節 監訳）. 2000. 『民族とナショナリズム』岩波書店.
- アントニー・D・スミス（巢山靖司・高木和義 他訳）. 1999. 『ネイションとエスニシティ—歴史社会的考察』名古屋大学出版会.

ナショナリズムについては数多くの書籍が出版されていますので、興味がおありでしたら調べてみてください。手ごろなところでは、次の書籍もとても参考になります。とくに大澤真幸さんの論考はアンダーソンの思想を分かりやすく伝えてくれています。

- 大澤真幸 他. 2020. 『別冊 NHK100 分 de 名著 ナショナリズム』NHK 出版.

【11】「民族叙事詩」と訳すべきか「国民叙事詩」と訳すべきか？

Kansallislaulun ja -lipun erikoisasema kansallisten symbolien joukossa johtuu siitä, että 'kansallinen' on näiden yhteydessä valtiota osoittava adjektiivi, eli kansallislaulu ja kansallislippu ovat valtiollisia ja siten selkeästi poliittisiä symboleja.

Kansalliseepos ei sen sijaan ole ensisijaisesti valtiollinen symboli vaan sen symboloi kansallista kulttuuria. Kansallisvaltiossa kansalliseepos viittaa valtioon välillisesti, kun sillä pyritään ilmaisemaan tiettyyn valtioon kuuluvien ihmisten keskinäistä suhdetta ja yhteiseen historiaan pohjaavaa merkityksenantoa.

■ 語句・文法

kansallis-laulu「国歌」／kansallis-lippu「国旗」／johtuu siitä, että ~「～に起因する、～から導かれる」／näiden yhteydessä「これらとの関係においては」／osoittava「示すような」能現分 < osoittaa／adjektiivi「形容詞」／sen sijaan「それに対して」／ensi-sijaisesti「第一に」／kansallis-valtio「ネーション・ステート、国民国家」／viitata「示す、言及する」／välillisesti「間接的に」< välillinen < väli／sillä「それにより」[接]< se／pyritään「試みる」受現 < pyrkiä (+ [入] ~MA 不[入])／kuuluvien「属すような」能現分[複属]< kuulua／pohjaavaa「もとづくような」能現分[分]< pohjata < pohja／merkityksen-anto「意味づけ、意味付与」(anto < antaa)

● フィンランド語理解のための訳例

[国歌や国旗の特別な地位は|国家的シンボルの中における]|起因する|[‘kansallinen’<という語>が|これらの<語との>関係においては|国家を意味する形容詞であるということに]、|つまり国歌と国旗は国家的なものであり|そうして明らかに政治的シンボルである。民族叙事詩は|それに対して|第一に国家的シンボルではない|そうではなく、それは民族的文化を象徴している。国民国家<ネーション・ステート>において|民族叙事詩は指し示す|国家を|間接的に、|なぜなら、それ<民族叙事詩>により表現しようとするから|ある特定の国家に属する人々の相互の関係を|そして共通の歴史にもとづくような意味づけを。

◎ 意識

国家的シンボルの中で国歌(kansallis 歌)と国旗(kansallis 旗)が特別な地位を与えられているのは、それらの表現においては‘kansallinen’という語が国家を示す形容詞であることに起因している。すなわち、国歌と国旗は国家的シンボルであり、したがって明らかに政治的シンボルなのである。それに対して民族叙事詩(kansallis 叙事詩)は、第一に国家的シンボルではなく、それは民族の(kansallinen)文化を象徴したものなのである。国民国家において民族叙事詩は、特定の国家に属する人々の相互の関係や、共通の歴史にもとづく意味づけを表現しようとするのであり、それはあくまでも間接的にだけ国家を指し示すものなのである。

★ 補足

【11】の文章の内容からすると kansallis-eepos における kansallis-は「国民の」というより「民族の」という日本語にした方が適切な気がします。さて、それでは 1800 年代にスウェーデンからロシア支配下へ移ったフィンランドはどのような時代を迎えていたのでしょうか。

【12】フィンランド人が「フィンランド人」になろうとしていた時代

Sen lisäksi että *Kalevala* koetaan kansalliseepoksena koko kansan kirjaksi – tai sen odotetaan olevan käyttöesine muistomerkin sijaan – *Kalevalan* katsotaan kansalliseepoksena myös kuvaavan Suomen kansaa ja sen ”kansallista luonnetta”. Ilmestytään eepos aikana, jolloin yksi keskeisiä kysymyksiä oli, millainen on ”suomalainen”, jollainen ruotsinkielisen sivistyneistön piti olla A.I. Arwidssonin poliittista ohjelmaa kuvaavan lauseen mukaan (”ruotsalaisia emme ole, venäläisiksi emme voi tulla, olkaamme suomalaisia”).

■ 語句・文法

sen lisäksi että ~「～であることに加えて」／*Kalevala* koetaan kirjaksi「*Kalevala* は本だと感じられる」(koetaan 受現 < kokea「経験する、感じる」)／sen odotetaan olevan「それは～であると期待される」[分構](odotetaan 受現 < odottaa, olevan 能現分[属])／*Kalevalan* katsotaan kuvaavan「*Kalevala* は描くとみなされる」[分構](kuvaavan 能現分[属] < kuvata)／Ilmestytään「実際に刊行されているのだから」(-han/-hän はさまざまな意味合いを付加しますが、日本語に訳すのは難しいものです。なんとなく「理由」や「根拠」を述べるときに使うことが多いような気がしています。ここでは「実際に～だから」「何といても～だから」などと訳しておきます)／jollainen「そのような(もの)」([関代]joka + 形容詞を作る接辞 -lainen)／sivistyneistö「教養層、知識層、インテリ層」< sivistynyt 能過分 < sivistyä／Adolf Ivar Arwidsson (1791-1858) はフィンランド人の作家・政治家・歴史研究者で、自ら発行する新聞において民族主義的主張を繰り返した結果、Turku 大学を追われ、1823 年にはスウェーデンへ移り住んでいる／kuvaavan「描くような」能現分[属] < kuvata／olkaamme「～であろう」[命]複 1 < olla

● フィンランド語理解のための訳例

[(以下のことに) 加えて | *Kalevala* は感じられる | 民族叙事詩として | 民族全体の書物だと | –あるいは、それは期待される | 実用品である(ことを) | 記念品である代わりに] – *Kalevala* は [みなされる | 民族叙事詩として | また描くことを | フィンランド民族を | そして、その「民族的特質」を]。実際に刊行された | 叙事詩は [< 次のような > ときに | そのときに、中心的な問題の一つは | どのようなものなのか < ということだった > | 「フィンランド人」とは、 | そのようなもので | スウェーデン語系知識層はあるべきだった | A.I. Arwidsson の政治的プログラムを描き出す文によれば (「スウェーデン人では | 我々はない、 | ロシア人には | 我々はなれない、 | フィンランド人であろう」)]。

◎ 意訳

Kalevala は民族叙事詩として民族全体の書籍であると感じられることに加え – あるいは、*Kalevala* は単なる記念品であるのではなく実際に利用されるものであることを期待される、ということに加え、*Kalevala* は民族叙事詩としてフィンランド民族と、その「民族的特質」を描き出しているともみなされている。A.I. Arwidsson の政治プログラムを表現する「我々はスウェーデン人ではない、我々はロシア人にはなれない、フィンランド人であろう」という言葉にしたがって、スウェーデン語知識層がそうある

べき「フィンランド人」とはどのようなものであるのかということが中心的な問題の一つであった、まさにそのような時期に、この叙事詩は出版されたのであるから。

【13】フィンランド人が「フィンランド人」になるには、何よりも「歴史」が必要だった

Yksi modernin kansakunnan keskeisiä kriteerejä, joita *Kalevalaan* sovellettiin sen vastaanotossa, oli juuri kysymys kansallisesta historiasta, suomalaisten historiasta ja itsetietoisuudesta omana kansana. Kun eepos ilmestyi 1835, SKS:n esimies Johan Gabriel Linsén lausui: ”Omistaessaan nämä eepiset runot Suomi voi voimistuneella omanarvontunnolla oppia oikealla tavalla ymmärtämään vastaista henkistä kehitystään. Suomi voi sanoa itselleen: Myös minulla on historia!” Tällä Linsén viittasi siihen valtionprojektiin, joka alkoi 1800-luvun alkupuolella, kun Venäjän keisarikunnan yhteyteen oli syntynyt uusi poliittinen yksikkö, Suomi.

■ 語句・文法

kriteeri「基準」／sovellettiin「適用された」受過 < soveltaa／vastaan-otto「受け入れ、受付、受容」／itse-tietoisuus「自己認識、自覚」／SKS = Suomalaisen Kirjallisuuden Seura「フィンランド文学協会」は 1831 年に設立された学術団体で、とくにフィンランドの言語や民間伝承などの分野で活発に活動し、現在でも多くの出版物を刊行している)／esi-mies「上司、監督者」／omistaessaan「所有するときに」e 不[内]+ 単 3 所接 [時構]< omistaa／eepinen「叙事詩の」／voimistuneella oman-arvon-tunnolla「強まった自尊感情により」(voimistuneella 能過分[接]< voimistua < voima、oman-arvon-tunnolla [接]< oman-arvon-tunto／vastainen「今後の、将来の」／keisarikunta「帝国」

● フィンランド語理解のための訳例

現代のネーションの中心的な基準の一つは|それら<基準>は Kalevala に適用された|その受容において、|まさに[問題だった|民族的歴史についての、|フィンランド人たちの歴史についての|そして自覚についての|独自の民族としての]。叙事詩が 1835 年に刊行されたとき、|SKS の理事である Johan Gabriel Linsén は言った:「所有するときに|これらの叙事詩を|フィンランドはできる|強まる自尊感情により|正しい方法で理解するようになる|今後の自らの精神的成長を。フィンランドは自分自身に言うことができる:また私にも歴史がある!」これにより Linsén は指し示した|国家プロジェクトを、|それは 1800 年代前半に始まった、|ロシア帝国との結びつきへ|生まれたときに|新しい政治的単位、フィンランドが。

◎ 意訳

Kaleva の受容においても適用されたような、現代のネーションが満たすべき中心的な基準のひとつは、まさに民族の歴史、フィンランド人たちの歴史と独自の民族としての自覚という問題であった。1835 年にこの叙事詩が刊行されたとき、SKS の理事である Johan Gabriel Linsén は次のように述べている。「これらの叙事詩を所有することになり、フィンランドは自尊感情を高めることで、今後の自らの精神的成長を正しく理解できるようになるだろう。フィンランドは自分自身にこう言うことができる

のである：私にも歴史があるのだ、と。」このように表現することにより Linsén は、1800 年代前半にロシア帝国内にフィンランドという新たな政治単位が生まれたときに始まった国家的プロジェクトというものに言及したのである。

★補足

以上のように、Kalevala がフィンランド人たちの共有する歴史であり、民族としての自覚を促すためのものであるとすれば、それはフィンランド人たち全員の手が届かなければならないと考えられたでしょう。それを実現するために、編纂者である Lönnrot はさまざまな苦労や工夫をしたらしいのですが、それらについて続けていきます。

【14】Lönnrot は Kalevala を「すべてのフィンランド人」のものとしようとした

Kalevalaa laatiessaan Lönnrot muokkasi kansanrunot tarkoituksellisesti viittaamaan Suomeen ja suomalaisiin kansakuntana. Hän ensinnäkin halusi tehdä kokoamansa runotekstit yleisesti käsitettäväksi, jotta ”koko kansakunta voi niitä lukea”.

■語句・文法

laatiessaan「作るときに」e 不 [内]+ 単 3 所接 [時構] < laatia / muokkasi < muokata「修正する、編集する」 / tarkoituksellisesti「意図的に」< tarkoituksellinen < tarkoitus < tarkoittaa / kokoamansa runotekstit「自ら集めた詩のテキストを」(kokoamansa 動分 [複主対]+ 単 3 所接 < koota) / käsitettäväksi「理解されるように」[変]< käsitettävä 受現分 < käsittää

●フィンランド語理解のための訳例

Kalevala を作るときに | Lönnrot は [修正した | 民間伝承詩を | 意図的に | 指し示すように | フィンランドを | そしてネーションとしてのフィンランド人たちを]。彼はまず [望んだ | することを | 自らが集めた詩のテキストを | 一般的に理解されるように]、| [次のことのために] | 「ネーション全体ができる | それを | 読む」]。

◎意訳

Kalevala を編纂する際に、民間伝承詩がフィンランドとネーションとしてのフィンランド人たちのことを指し示すよう、Lönnrot は意図的に改変した。彼はまず自らが蒐集した詩のテキストを一般に理解できるようなものにしたと思ったが、それは、「ネーションの構成員全員がそれらを読むことができる」ようにするためだった。

【15】Lönnrot は自分の名前を表紙に載せなかった

Kalevala-eepoksen kansallisen aseman kannalta oli myös se merkittävää, että Lönnrot ei nimikoinut yhtäkään *Kalevala*-julkaisua itsensä mukaan eikä kirjannut nimeään eeposjulkaisun kansilehdelle.

■語句・文法

nimikoida「頭文字を(縫い)つける、名前を記す」< nimi/yhtäkään「ひとつも(～ない)」< yksi/itsensä mukaan「自分自身<の名前>にしたがって」/kirjata「記す」< kirja/kansi-lehti「表紙」

●フィンランド語理解のための訳例

Kalevala 叙事詩の民族的地位の観点からは|また重要である|[Lönnrot は印をつけなかった|どの Kalevala 出版物にも|自分<の名前>にしたがって|そして記さなかった|自らの名前を|叙事詩刊行物の表紙に]。

◎意訳

叙事詩 Kalevala が民族全体のものとしての地位を得ることににおいては、刊行されるいずれの Kalevala においても Lönnrot が自分の名前を示すことなく、また刊行される叙事詩の表紙に自分の名前を記すこともなかったことがまた重要な意味をもった。

【16】Lönnrot は言葉の面でも地域性を排除した

Sen lisäksi että Lönnrot kansallisti kansanrunot yhdenmukaistamalla niiden kieltä ja häivyttämällä niiden paikallisuuden, hän rakensi runoista juonellisen kertomuksen, joka alkoi maailman synnystä, kuvasi muinaista sankariaikaa ja päättyi suomalaisen kansakunnan syntyyn.

■語句・文法

kansallistaa「国有化する、国営化する(ここでは「民族全体のものとする」といった意味だと思われる) / yhden-mukaistamalla「均質化することにより、統一することにより、標準化することにより」動名[接]< yhden-mukaistaa < yhden-mukainen / häivyttämällä「消し去ることにより」動名[接]< häivyttää < häipyä / paikallisuus「地域性」< paikallinen < paikka / juonellinen「あらすじの(あるような)」< juoni

●フィンランド語理解のための訳例

[<次のことに>加えて|Lönnrot は民族全体のものとした|民間伝承詩を|統一することにより|それらの言語を|そして消し去ることにより|それらの地域性を]、|彼は作った|詩から|あらすじのある物語を、|それは世界の誕生から始まった、|古代の英雄時代を描いた|そしてフィンランドのネーションの誕生で終わった。

◎意訳

Lönnrot は民間伝承詩の言語を統一し、それらの地域性を消し去ることによって、民間伝承詩を民族全体のものとしたが、それに加えて彼は、世界の誕生に始まり、古代の英雄時代を描き、そしてフィンランド・ネーションの誕生で終わるという一貫したあらすじをもつような物語を構築したのである。

★補足

さて、Lönnrot の努力のかいもあり、Kalevala はフィンランド人たちに民族としての自覚を促し、最終的には独立を可能にした、などという記述に出会うこともあります。フィンランドが独立したのは Kalevala のおかげなのではないでしょうか（どうも、こういう「すてきな」話には文句をつけたくないのは私の性格が悪いからでしょうか）。

【17】フィンランドを創り出したのは Kalevala?

Kalevalan viesti poliittisena symbolina on sen vakuuttaminen, että kansan joka ”kuuluu yhteen” kielellisesti, kulttuurisesti ja jopa biologisesti, pitää olla yhtenäinen myös poliittisesti. Jos poliittista yhtenäisyyttä ei ole, kielellistä, kulttuurista ja geneettistä yhtenäisyyttä osoittavien kansallisten symbolien – kuten juuri *Kalevalan* – tehtävä on luoda ja aikaansaada poliittinen yhtenäisyys, tai ainakin valaa uskoa sen mahdollisuuteen.

■語句・文法

vakuuttaminen「断言すること」動名 < vakuuttaa / kansan ... pitää olla yhtenäinen「民族は一体でなければならない」 / kuulua yhteen「一つに属する、一体である」 / yhtenäisyys「一体性」 < yhtenäinen < yksi / osoittavien「示すような」[複属] < osoittava 能現分 < osoittaa / tehtävä「役割」 / aikaan-saada = saada aikaan「もたらず、生じさせる」 / valaa「流し込む、注ぐ」

●フィンランド語理解のための訳例

[Kalevala のメッセージは|政治的象徴としての| (että 以下のことを) 断言することだ| [民族は| それは言語的、文化的、そして生物学的にさえ「一体である」]| 政治的にも一体でなければならないことを。もし政治的一体性がなければ、|[言語的、文化的、そして遺伝的一体性を示す国民的な象徴の|—まさに Kalevala のような—|役割は] [創り出し生み出すことだ|政治的一体性を]、|あるいは[少なくとも流し込むことだ|その可能性に対する信念を]。

◎意訳

Kalevala のもつ政治的メッセージとは、言語的・文化的に、そしてさらには生物学的に「一つに属するような」民族はまた、政治的にも統合されていなければならないということを断言することである。もし政治的な統合が存在しなければ、政治的統合を創造・生成することが、あるいは少なくとも、そのような統合が存在することへの信念というものを人々の心の中に植えつけることが、まさに言語的、文化的、そして遺伝学的な統合を示す Kalevala のような民族的シンボルの役割である。

【18】いや、Kalevala の政治的意義を強調しすぎてはいけない

Joidenkin kansanrunoutentutkijoiden mielestä Suomi on saavuttanut itsenäisen valtion aseman juuri *Kalevalan* ansiosta. Lönnrotin eepokselle voi tuskin antaa aivan näin suurta poliittista merkitystä, mutta on kiistatonta, että *Kalevalan* laatimisella ja julkaisemisella on ollut erityisen kannustava vaikutus sivistykselliseen ja muuhun

yhteiskunnallis-poliittiseen ja taloudelliseen toimintaan, taide ja kulttuuripoliitikka mukaan lukien. Mikään yhteiskunta ei kuitenkaan elä eikä kasva pelkällä menneisyyttä sankarillistavalla tai keskinäistä yhteisyyttä luovalla symboliikalla, eikä sillä varsinkaan pääse kansainvälisen politiikan ja valtioiden välisille areenoille itsenäiseksi toimijaksi.

■ 語句・文法

joidenkin「ある～、何人かの～」[複属]<jokin/kansan-runouden-tutkijoiden「民間伝承詩の研究者たちの」[複属]<tutkija<tutkia/tuskin「ほとんど～ない、とても～ない」/kiistaton「議論の余地のない」<kiista/laatimisella「作るのことはない」動名[接]<laatia/julkaisemisella「出版することには」動名[接]<julkaista<julki/kannustava「鼓舞するような」能現分<kannustaa/mukaan lukien「～を含め」(lukien e 不[具]<lukea)/menneisyyttä sankarillistavalla「過去を英雄視するような」(sankarillistavalla[接]<sankarillistava 能現分<sankarillistaa<sankarillinen<sankari)/yhteisyyttä「一体感を、連帯を」[分]<yhteisyys<yhteinen<yksi/luovalla「創り出すような」[接]<luova 能現分<luoda/symboliikka「象徴、象徴言語」/areenoille「舞台へ、土俵へ」[複向]<areena

● フィンランド語理解のための訳例

ある民間伝承詩研究者たちの考えでは|フィンランドは獲得した|独立国家の地位を|まさに Kalevala のおかげで。Lönnrot の叙事詩へ|ほとんど与えることはできない|これほど大きな政治的な意味を、|しかし議論の余地はない、|Kalevala を編纂することには|そして出版することには|とくに鼓舞するような影響があった|文化的な|そして、そのほかの社会政治的な、そして経済的な活動に、|芸術と文化政策も含め。どんな社会もしかしながら生きない|そして成長しない|単に過去を英雄視するような|そして相互の連帯を創り出すような象徴によって、|そして、それによりとりわけ入ることはできない|国際政治の|そして国家間の舞台へ|独立した行為者として。

◎ 意識

フィンランドが独立国家の地位を得たのは Kalevala のおかげだと考えるような民間伝承詩の研究者たちもいる。しかしながら Lönnrot が編纂した叙事詩にそのような大きな政治的意義を見出すことはまずできないだろう。それでも、Kalevala の編纂と出版が、芸術や文化政策も含め、文化やその他の社会政治的、あるいは経済的活動をとくに鼓舞するような影響を与えたことにも議論の余地はない。しかしながら、どんな社会であっても、過去を英雄視したり、相互の連帯を生み出すような単なる象徴だけによって生き、成長することはなく、とりわけ独立した行為者として国際政治や国家間の舞台へ登場するということはないだろう。

★ 補足

やはり Kalevala が果たした政治的な役割というものを過大評価すべきではないのでしょう。そうであっても Kalevala が重要な意味をもってきたことに変わりはなく、とくに芸術家たちに与えた影響に

は非常に大きなものがあります。Kalevala に大きな影響を受けた芸術家の一人である Sibelius や、それに関連して民族ロマン主義については『フィンランド語の世界を読む』の 14 課でも触れました。ここでは芸術家たちの間に広がった Karelianismi や民族ロマン主義、そして Akseli Gallen-Kallela を中心に見ていきます。

【19】Kalevala の故郷 Karjala への関心—Karelianismi の勃興

- a. Kalevalan historialliseen ja kulttuuripoliittiseen merkitykseen on eepoksen ilmestymisestä lähtien kuulunut keskeisesti kysymys sen karjalaisuudesta. Sekä Kalevalan ja Kantelettaren että kansanrunouden myötä Karjala alkoi saada erikoisleimaa ”runojen aarremaana” sekä Suomen ja suomalaisuuden muinaisuuden idyllisenä museona.
- b. Romanttinen muinaisuuteen, ”kalevalaisuuteen” ja Karjalaan kohdistunut kiinnostus väheni taiteissa realismin aikakaudella 1860-1870 luvuilla, mutta 1880-luvun puolivälistä alkoi uusi fennomaanis-romanttinen innostuksen aalto, joka huipentui 1890-luvun karelianismiin.
- c. Karelianismin aikakaudella Kalevala nousi ennen näkemättömään arvoon innostuksen ja aiheiden lähteenä taiteissa.

■ 語句・文法

on kuulunut「含まれていた」完 < kuulua / ilmestymisestä lähtien「出版以来」(ilmestymisestä [出] < ilmestyminen 動名 < ilmestyä, lähtien「～以来」 / karjalaisuus「カレリア性、カレリアのものであること」 / Kanteletar は、やはり民間伝承詩などをもとに Lönnrot が編纂した作品 / erikoisleima「特別な性格、特別な烙印」 / aarre-maa「宝の国、宝の地」 / muinaisuus「古代」 < muinainen / idyllinen「のどかな、牧歌的な」 < idylli / kalevalaisuus「Kalevala 的であること」 / kohdistunut「向けられたような」能過分 < kohdistua < kohdistaa < kohde / fennomaanis-romanttinen「フェンノマン・ロマン主義的な」(fennomaanis- < fennomaaninen < fennomaani「(過激な)フィンランド(語)主義者」(fennomania「フェンノマニア主義」は 1800 年代に起こった強力な民族主義的運動) / innostus「熱中、熱狂」 < innostua < innostaa < into / huipentua「最高潮に達する」 ⇒ huippu / karelianismi「カレリア主義」(多くの研究者や芸術家がカレリアに目を向け、そして彼らの多くが実際にカレリアを訪れた) / ennen näkemättömään「前代未聞の、以前に見たことのないような」(näkemättömään [入] < näkemätön 否分 < nähdä)

● フィンランド語理解のための訳例

- a. Kalevala の歴史的、文化政策的意義には | 叙事詩の出版以来 | 含まれていた | 中心的に | 問題が | そのカレリア性についての。Kalevala と Kanteletar、そして民間伝承詩とともに、カレリアは得始めた | 特別な性格を | 「詩の宝の地として」 | そしてフィンランドとフィンランドらしさの古代ののどかな博物館として。
- b. ロマン主義的な | 古代へ、「Kalevala らしさ」へ、そしてカレリアへ向けられた関心は | 減少した | 芸術において | リアリズムの時代に | 1860-1870 代に、 | しかし 1880 年代の中ごろに始まった | 新しい

フェンノマニア・ロマン主義的な熱狂の波が、|それは頂点に達した|1890年代のカレリア主義へと。

- c. カレリア主義の時代に Kalevala は上がった|前代未聞の価値へと|熱狂と|題材の源として|芸術において。

◎意訳

- a. Kalevala の歴史的な重要性や文化政策上の意義という事柄には、この叙事詩の刊行以来、それがカレリアで収集されたことによりもつ「カレリア性」ということが中心的な問題として含まれていた。Kalevala、Kanteletar、そして民間伝承詩によって、カレリアは「詩の宝庫」として、そして古代のフィンランドの姿とフィンランド性が残る牧歌的な博物館として特別な性格を帯び始めた。
- b. 1860年代から1870年代にかけてのリアリズムの時代には、古代、「Kaleva 的あること」、そしてカレリアに向けられたロマン主義的な関心は芸術界では薄れていったが、1880年代半ばからはフェンノマニア・ロマン主義的な熱狂の新しい波が起こり、それは1890年代のカレリア主義で頂点に達していくことになる。
- c. カレリア主義の時代、Kalevala は芸術界において熱狂の源として、そして題材の源として、かつてないほどの価値をもつようになった。

【20】Kalevala と言えば画家 Gallen-Kallela の絵を見るしかない。

- a. Akseli Gallen-Kallela oli taidemaalari, joka innostui Kalevalan aiheista. Hänen maalauksiaan ovat Lemminkäisen äiti, Kullervon kirous ja Sammon ryöstö.
- b. Hänen työnsä on ollut sittemmin niin suosittua, että Kalevalan henkilöt hahmottuvat suomalaisten mielessä tänäkin päivänä ensisijaisesti hänen taiteensa vaikutuksesta.

■語句・文法

Akseli Gallen-Kallela (1865-1931)はフィンランドを代表する画家 / taide-maalari「画家」 / innostua「熱中する、夢中になる」 < into / hahmottua「形を成す」 < hahmo / ensi-sijaisesti「第一に」

●フィンランド語理解のための訳例

- a. Akseli Gallen-Kallela は画家だった、|その画家は夢中になった|Kalevala の題材に。彼の絵には「Lemminkäinen の母」「Kullervo の呪い」、そして「Sampo の強奪」がある。
- b. 彼の作品は後にとても人気となり、|Kalevala の登場人物たちは姿を現す|フィンランド人たちの心の中では|今日でも|まず彼の芸術の影響により。

◎意訳

- a. Akseli Gallen-Kallela は画家だったが、Kalevala を題材とすることに熱中した。彼の描いた絵には「Lemminkäinen の母」「Kullervo の呪い」、そして「Sampo の強奪」がある。
- b. 彼の作品は後に非常に人気となったために、Kalevala の登場人物というものは、フィンランド人た

ちの心の中では今日でもまず彼の芸術の影響により姿を現すのである。

【21】実は民族ロマン主義の背後には「ジャポニズム」が？

Suomessa puhutaan kansallisromantiikasta, ja vaikka sen periaatteena olikin kääntää katse Euroopan sijaan omaan kulttuuriperintöön ja Kalevalaan, ei sekään olisi syntynyt ilman japonismin vaikutusta. Japonismi nosti esiin erilaisen estetiikan, luonnon kuvaamisen luontoa kunnioittamalla ja tietysti kaikenlaisen eksotiikan.

■ 語句・文法

japonismi (= japanismi) 「ジャポニズム、日本趣味」(19世紀後半に日本の芸術に関してヨーロッパで起こったブーム) / nostaa esiin 「提示する」 / estetiikka 「美学」 / luonnon kuvaamisen luontoa kunnioittamalla 「自然に敬意を表することにより自然を描くことを」(kuvaamisen [属対] < kuvaaminen 動名 < kuvata、kunnioittamalla 「敬意を表することにより」MA 不[接] < kunnioittaa < kunnia

● フィンランド語理解のための訳例

フィンランドでは民族ロマン主義について語る、|そして、[その原則となるのは目を向けることだが|ヨーロッパの代わりに自分自身の文化遺産と Kalevala へと、]|それさえも生まれなかっただろう|ジャポニズムの影響なしには。ジャポニズムは提示した|異なる種類の美意識を、|[自然を描写することを|自然に敬意を払うことにより]|そして、もちろんあらゆる種類の異国情緒を。

◎ 意訳

フィンランドでは民族ロマン主義というものについてしばしば語られる。その原則となるのは、ヨーロッパではなく自らの文化的伝統や Kalevala に目を向けるということだが、その民族ロマン主義でさえジャポニズムの影響なしには生まれなかったであろう。ジャポニズムによりさまざまな美意識や、あるいは自然に敬意を払うことで自然を描き出すということ、そして、もちろんあらゆる異国情緒といったものが登場してきたのである。

【22】Gallen-Kallela の独特な様式も Kalevala から生まれた。

Voimakkaan ääriviivan ja synteettisen muodon tyyli kehittyi monisäikeisenä prosessina, jota epäilemättä tukivat Gallénin ahkerat graafiset kokeilut. Eteneminen ei ollut helppoa, sillä etsauksen ja puupiirrostechniikan opiskeleminen oli tuohon aikaan vaikeata. Työläntyneenä Gallén valittikin J. J. Tikkaselle, etteivät ulkomaiset kollegat olleet halukkaita paljastamaan esimerkiksi japanilaisen puupiirroksen menetelmiä.

■ 語句・文法

ääri-viiva 「輪郭」 / synteettinen 「統合された、合成された」 / moni-säikeisenä 「複雑な」 [様] < moni-säikeinen / epäilemättä 「疑いなく」 MA 不[欠] < epäillä / graafinen 「グラフィック(アート)

の」／kokeilu「実験」<kokeilla／etenemin「進歩すること」動名 < edetä／etsaus「エッチング」< etsata／puu-piirros「木版画」／työlääntyneenä「疲れた状態で、飽き飽きして」能過分[様] < työlääntyä／valitti「不平をもらした」< valittaa／J. J. Tikkanen (1857-1930) フィンランドの美術史研究家／kollega「同僚」／halukkaita「望むような」[複分]< halukas

●フィンランド語理解のための訳例

(Gallén-Kallela の) 力強い輪郭線と統合的な形の様式は発展した|複雑な過程として、|それを疑いなく支えた|Gallén の熱心なグラフィックアート上の取り組みが。進捗は容易ではなかった、|というのも、エッチングや木版画の技術を学ぶことはそのころは難しかったから。疲れ切った状態で Gallén は不平をもらしてもいる|J. J. Tikkanen に、|外国の同業者たちがしたがらないと|明らかにすることを|たとえば日本の木版画の手法を。

◎意訳

Gallén-Kallela の絵における力強い輪郭線とさまざまな芸術思潮が統合された様式は複雑な過程を経て生み出されたものだったが、Gallén がグラフィックアートに熱心に取り組んだことがその過程を支えたであろうことに疑いはないだろう。そのような様式の誕生は順調に進んだわけではなかった。というのも、エッチングや木版画の技術を学ぶことは当時においては難しいことであったからだ。疲れ果てた Gallén は J.J. Tikkanen に対して、外国の同業者たちが、たとえば日本の木版画の手法を明らかにしたがらないと不満を漏らしていたのである。

【23】Sibelius や Gallen-Kallela など多くの芸術家が活躍した Kultakausi

- a. Miten sitten 1890-lukua jäsennelläänkin, kauden pääsuuntauksiksi muodostuivat symbolismi ja kansallinen jugend. Saimme siis vihdoinkin oman kansallisen tyylin, jonka Gallén takoi Kalevala-romantiikasta ja Euroopan tyylivirtauksista. Ajan taidetta ei ole turhaan nimetty kultakaudeksi.
- b. Suomen kultakauden taiteilijat, Albert Edelfelt, Akseli Gallen-Kallela, Pekka Halonen ja myös Emil Wikström haalivat Pariisin tavarataloista japanilaista esineistöä.

■語句・文法

miten sitten -kin「どのように～するにしても」／jäsennellä「分析する」< jäsentää／suuntaus「方向、傾向、思潮」< suunnata < suunta／jugend「アール・ヌーボー（19世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパやアメリカで隆盛を見せた芸術運動）」／takoa「鍛造する」／tyyli-virtaus「様式の流れ、様式思潮」／ei ole nimetty「名づけられていない」受完否 < nimittää／turhaan「無駄に、意味なく」／Albert Edelfelt (1854-1905) 画家／Pekka Halonen (1866-1933) 画家／Emil Wikström (1864-1942) 彫刻家／haalii「かき集める、買う」

●フィンランド語理解のための訳例

- a. どのように 1890 年代を分析するにせよ、|この時代の主要な思潮となったのは|象徴主義と民族

(主義)的なアール・ヌーボーだった。我々つまり、とうとう手に入れた|自分たちの民族的様式を、|それを Gallén が鍛造した|カレワラ・ロマン主義とヨーロッパの様式思潮から。この時代の芸術は意味もなく名づけられているわけではない|黄金期と。

- b. フィンランドの黄金期の芸術家たちである Albert Edelfelt、Akseli Gallen-Kallela、Pekka Halonen、そして Emil Wikström もかき集めた|パリのデパートから|日本の品物を。

◎意識

- a. 1890 年代というものがいかに分析されるにせよ、この時期の主要な芸術思潮となったのは象徴主義と民族主義的アール・ヌーボーであった。つまり、Gallén がカレワラ・ロマン主義とヨーロッパの様式思潮を溶け合わせて築き上げた独自の民族的様式というものを、とうとう我々は手に入れたのである。したがって、この時代の芸術を黄金期と名づけることにも十分な根拠があるのである。
- b. フィンランド黄金期の芸術家たち、Albert Edelfelt、Akseli Gallen-Kallela、Pekka Halonen、そして Emil Wikström もパリのデパートで日本の品物をかき集めたのである。

★補足

2023 年になってフィンランドは、Kalevala に「欧州文化遺産認証」が認められるよう申請したというニュースがありました。

【24】フィンランドは Kalevala の欧州文化遺産認証を申請

Suomi hakee Kalevalalle Euroopan kulttuuriperintötunnusta. Suomi jätti eilen hakemuksen, jolla on tavoitteena saada Kalevalalle kulttuuriperintötunnus elävänä eeposperinteenä, kertoo hankkeen päähakija Suomalaisen Kirjallisuuden Seura (SKS).

Euroopan komissio tekee päätöksen asiassa kevääseen 2024 mennessä.

■語句・文法

hakea「申請する」/Euroopan kulttuuri-perintö-tunnus「欧州文化遺産認証」(欧州連合の機関である欧州委員会が認める認証)/jättää「提出する」/hakemus「申請(書)」< hakea/elävänä「生きているような」能現分 < elää/hanke「プロジェクト」< hankkia/hakija「申請者」< hakea/päätös「決定」< päättää

●フィンランド語理解のための訳例

フィンランドは申請する|Kalevala のために|欧州文化遺産認証を。フィンランドは提出した|昨日|申請を、|それにより|目的としてあるのは|手に入れることである|Kalevale へ|文化遺産認証を|生きた叙事詩の伝統として、|と語っている|プロジェクトの主要申請者|フィンランド文学協会(SKs)は。欧州委員会は決定をする|この問題において|春までに|2024 年までに。

◎意識

フィンランドは Kalevala について欧州文化遺産認証を申請する。フィンランドは昨日、生きた叙事

詩の伝統としての Kalevala について、文化遺産認証を取得することを目的とする申請書を提出したと、このプロジェクトの主要申請者であるフィンランド文学協会 (SKS) は語っている。

欧州連合の機関である欧州委員会は、この件について 2024 年春までには決定を下すことになっている。

★補足

欧州文化遺産認証の主たる申請者は SKS ですが、多くの協力機関が参加しており、この後の【29】でも取り上げる Gallen-Kallelan Museo もその一つです。

【25】Kalevala は欧州全体のもの？

Kalevala ilmentää yleiseurooppalaisia aatevirtauksia ja eeposperinteitä. Esimerkiksi antiikin eepokset (Ilias, Odysseia) olivat Elias Lönnrotin esikuvia hänen laatiessaan Kalevalaa. Eepoksia ei Euroopan kulttuuriperintötunnuksen saaneiden kohteiden joukossa vielä ole. Valtaosa tunnuksen saaneista on aineellisia: museoita, arkeologisia kaivauksia ja muistomerkkejä. Kulttuuriperinnöt ovat lähtökohtaisesti monitulkintaisia; niihin tutustumalla ja perehtymällä opimme lisää itsestämme ja muista. Toivomme, että tunnuksen myötä herätetään myös Euroopan tasolla keskustelua eeposten elävästä perinnöstä.

■ 語句・文法

yleis-eurooppalainen「汎ヨーロッパ的な」／aate-virtaus「思想の流れ、思潮」／antiikki「古代ギリシャ・ローマ時代」／esi-kuva「見本、模範、例」／laatiessaan「作るときに」e 不[内]+ 単 3 所接 < laatia [時構]／kulttuuri-perintö-tunnuksen saaneiden kohteiden joukossa「文化遺産認証を手に入れている対象の中で」(saaneiden 能過分[複属]< saada、kohteiden [複属]< kohde)／tunnuksen saaneista「認証を手に入れたもののうち」(saaneista 能過分[複出]< saada)／kaivaus「発掘」< kaivaa／muisto-merkki「記念碑、記念物」／lähtö-kohtaisesti「原則として、根本的には」／moni-tulkintainen「多様な解釈の可能な」(tulkintainen < tulkinta < tulkita)／tutustumalla「知り合うことにより」MA 不[接]< tutustua < tuttu／perehtymällä「親しむことにより」MA 不[接]< perehtyä ⇒ perhe, perä／herätetään「目覚めさせる」受現< herättää

● フィンランド語理解のための訳例

Kalevala は明らかにする|汎ヨーロッパ的な思潮と叙事詩の伝統を。たとえば、古代の叙事詩(イーリアス、オデュッセイア)は Elias Lönnrot の手本だった|彼が Kalevala を作る時に。叙事詩はない|欧州文化遺産認証を手に入れた対象の中には|まだ。大部分は|認証を得たもののうち|有形だ: 博物館、考古学的発掘、そして記念碑。文化遺産は原則として多くの解釈が可能だ;それらを知ることにより、そして親しむことにより|我々は学ぶ|さらに我々自身について|そして他者について。我々は望む、|[認証とともに目覚めさせる|またヨーロッパのレベルにおいて|議論を|叙事詩の生きた遺産について]。

◎意訳

Kalevala は欧州全体が共有する思想の流れや叙事詩の伝統を体現している。たとえば、古代ギリシャの叙事詩（イーリアス、オデュッセイア）は、Kalevala を編纂する際に Elias Lönnrot が手本としたものである。欧州遺産認証を取得している対象の中に、叙事詩はいまだない。認証を取得した遺産の大半は博物館、考古学的発掘物、モニュメントといった有形のものである。文化遺産は本来、多様な解釈を許すものである；そのため、文化遺産を知り、探求することで、我々は自分自身や他者についてより多くのことを学ぶことになる。Kalevala が認証を取得することにより、今でも生きているものとしての叙事詩という遺産についてヨーロッパレベルでの議論を呼び起こすことも、我々は希望している。

★補足

すでに触れたように Kalevala の原典となったのは民衆の間で歌い継がれていた民間伝承詩です。しかしながら、Kalevala そのものはたして民衆文化を映し出すような民衆たちのものなのでしょう。この問題についても、多くの議論が行われてきたようです。

【26】Kalevala は”Lönnrotin eepos”?

Kalevala-eepos on Lönnrotin luomus ja monet sen teemat, tapahtumat ja henkilöt ovat hänen taiteellisia näkemyksiään. Historian, mytologian, kansanrunouden ja etnografisen tutkimuksen näkökulmasta Lönnrotin luomien kertomusten lukeminen ja kokeminen ”muinaisuuden” tai kansanomaisen kulttuurin dokumentteina on erehdys.

■語句・文法

luomus「創作物」< luoda／näkemys「見方、ビジョン」< nähdä／etnografinen tutkimus「民族誌研究」／näkö-kulma「視点、観点」／luomien「創り出したような」動分[複属]< luoda／muinaisuus「古代」< muinainen／kansan-omainen「民衆の、大衆的な」／dokumentti「資料、記録」／erehdys「誤り」< erehtyä

●フィンランド語理解のための訳例

叙事詩 Kalevala は Lönnrot の創作であり、その多くのテーマ、出来事、そして登場人物は彼の芸術観の表れである。歴史、神話、民間伝承、そして民族誌研究の観点からすれば、[Lönnrot が創り出した物語を読むことは|そして経験することは|「古代」や、あるいは民衆文化の記録として]|誤りである。

◎意訳

叙事詩 Kalevala は Lönnrot の創作であり、その多くのテーマ、出来事、そして登場人物は彼の芸術観の表れである。歴史、神話、民間伝承、そして民族誌研究の観点からすれば、Lönnrot が創り出した物語を「古代」や、あるいは民衆文化の記録として読み経験することは誤りである。

【27】Kalevala は誰のものなのか？

Kysymys siitä, kenen kulttuuriperintöä Kalevala ensisijaisesti on, puhuttaa yksilöitä ja yhteisöjä. Käsitteitä Kalevalan omistajuudesta hämärtää eepoksen moninainen luonne: se on yhden tekijän luoma kaunokirjallinen teos, jonka aineistona on kansanrunomuistiinpanoja. Elias Lönnrot rakensi henkilöhaamot, loi juonikokonaisuuden sekä muokkasi runojen kieltä. Hänen tavoitteenaan oli julkaista yhtenäinen eeposrunoelma, jonka hän itse tulkitsi suomalaisten esihistoriaa heijastavaksi. Tästä johtuen Kalevala on monilla tavoin erilainen kuin sen lähteenä olevat kansanrunot. Mikäli tunnus myönnetään Kalevalalle, syventää se yhdessä pedagogisen hankkeen kanssa Kalevalan moninaisuuden ja nykykäytön ymmärtämistä, eurooppalaisten nuorten välistä vuoropuhelua sekä avaa myös karjalaista, suomalaista ja inkeriläistä runolaulukulttuuria osana eeposperinnettä.

■ 語句・文法

puhuttaa 「話させる、議論を呼び起こす」 < puhua / omistajuudesta 「所有権について」 [出] < omistajuus < omistaja < omistaa < oma / hämärtää 「ぼやけさせる、不鮮明にする」 < hämära / luoma 「創造したような」 動分 < luoda / kauno-kirjallinen 「文学の、文芸の、フィクションの」 / muistiin-pano 「記録、ノート」 / juoni-kokonaisuuden 「あらすじの全体を」 [属対] < -kokonaisuus < kokonainen < koko / heijastavaksi 「反映するものだと」 能現分 [変] < heijastaa / tästä johtuen 「これにより、このせいで」 (johtuen e 不 [具] < johtua) / lähteenä olevat 「資料となっていたような」 (olevat [複主] < oleva 能現分 < olla) / myönnetään 「認められる」 受現 < myöntää / pedagoginen 「教育(学)上の」 / vuoro-puhelu 「対話」

● フィンランド語理解のための訳例

[(次のこと) についての問題 | だれの文化遺産なのか | Kalevala は | 第一に]、| 議論させる | 個人と社会に。 [考え方を | Kalevala の所有権についての] | あいまいにさせる | 叙事詩の多様な性格が: それは一人の作者の創造した文芸作品である、| その資料としてあった | 民間伝承詩の記録が。 Elias Lönnrot は作った | 登場人物たちを、| 創った | あらすじの全体を | そして修正した | 詩の言語を。彼の目標としてあった | 出版することが | 統一された叙事詩集を、| それを彼自身は解釈した | フィンランド人たちの先史を反映したものだと。これにより | Kalevala は多くの点で異なっている | その資料となっていた民間伝承詩とは。認証が認められれば | Kalevala に、| 深める | それは | [一緒に | 教育上のプロジェクトとともに] | [Kalevala の多様性を | そして現代における利用を | 理解することを]、| ヨーロッパの若者たちの間における対話を | そしてまた開く | カレリアの、フィンランドの、イングリアの古詩歌謡文化を | 一部として | 叙事詩の伝統の。

◎ 意訳

カレワラが主として誰の文化遺産であるのかという問題は、個人や社会において議論となっている。Kalevala が誰のものであるのかに関するさまざまな考え方は、その叙事詩のもつ多面的な性質

によってあいまいにされてしまう：Kalevala は一人の作者が作り出した文芸作品であり、一方でその原典となったのは民間伝承詩を記録したものである。Elias Lönnrot は、登場人物を構築し、全体のあらすじを創作し、さらに詩の言語を磨いた。彼の目的となっていたのは首尾一貫した叙事詩を公にすることであり、その叙事詩を彼自身はフィンランド人の先史を反映しているものだと解釈していた。その結果として、Kalevala は、原典となった民間伝承詩とは多くの点で異なるものとなっている。Kalevala に対して認証が認められれば、それは教育プロジェクトとともに、Kalevala の多様性と現代的な利用法についての理解を深め、ヨーロッパの若者たちの間における対話を促し、さらにはカレリア、フィンランド、イングリアの古詩歌謡の文化を叙事詩の伝統の一部として開放することになるだろう。

★補足

Kalevala に欧州文化遺産認証を与えるよう求める申請した目的や動機はいくつもあるようですが、そのうちの一つである「カレリア／カレリア語」の問題について読んでいきましょう。

【28】文化遺産登録はカレリアやカレリア語に対する認識をも高めるだろう

Tunnus tarjoaa tilaisuuden tuoda näkyväksi ja keskusteluun myös kulttuuristen vähemmistöjen ja karjalan kielen asemaa. Suomessa ja Venäjällä puhuttu karjalan kieli on uhanalainen, eikä sillä ole Suomessa virallisen kielen asemaa. Tunnuksen myötä hankkeessa lisätään myös suomalaisten tietoisuutta karjalankielisistä ja karjalaisuuden moninaisuudesta.

■語句・文法

tuoda näkyväksi ja keskusteluun「目立たせ、議論に持ち込む（見えるように、そして議論の中にもって来る）」（näkyväksi[変]<näkyvä「見えるような、目立つような」能現分 <näkyä）／puhuttu「話されるような」受過分 <puhua／uhan-alainen「危機にさらされた、絶滅の危機に瀕した」（uhan[属]<uhka）／moninaisuus「多様性」

●フィンランド語理解のための訳例

認証は提供する|機会を|もってくるための|見えるように|そして議論へ|また文化的少数派たちとカレリア語の地位を。フィンランドとロシアで話されるカレリア語は危機にさらされており、|それにはフィンランドにおいて公的言語としての地位はない。認証とともにプロジェクトにおいては増やされる|またフィンランド人たちの認識が|カレリア語話者たちについて|そしてカレリア性の多様性について。

◎意訳

Kalevala に対して欧州文化遺産認証が認められれば、そのことはまた文化的少数派やカレリア語の地位というものを世間に知らしめ、議論に持ち込ませる機会を提供することにもなるだろう。フィンランドとロシアで話されているカレリア語は絶滅の危機に瀕しており、またカレリア語はフィンランドにおいて公的な言語としての地位を得てはいない。文化遺産認証を得ることにより、プロジェクトにおいてはまたカレリア語話者たちやカレリアというものの特質がもつ多様性についてのフィンランド人

たちの認識を高めることにもつながるだろう。

★補足

フィンランドにおけるカレリア語の話者数は約 1 万人ほどとも言われています。

さて、欧州文化遺産認証の共同申請者でもある Gallen-Kallela Museo は、気候変動や生物多様性の喪失という問題から Kalevala に向き合う重要性を指摘しています。

【29】Gallen-Kallela 美術館のプロジェクトは気候変動や生物多様性にも目を向ける

Gallen-Kallelan Museon hanke *Eppinen taide ja luonto* kiinnittää katseen Kalevalasta kumpuaviin luontoaiheiseen. Sotkat, käet ja kotkat sekä Tuonelan joutsenet ovat läsnä niin Kalevalan runoissa kuin Akseli Gallen-Kallelan taiteessakin.

Ilmastomuutos ja lajien monimuotoisuuden katoaminen luovat uhkakuvia tulevaisuudesta, jossa Kalevalan tarinoiden luonnosta ovat jäljellä vain niistä kertovat tarinat ja kuvitukset. *Eppinen taide ja luonto* -hanke heittää ilmoille kysymyksen siitä, mitä Kalevala voi opettaa meille luonnosta ja sen merkityksestä entisajan ihmisille? Entäpä mitä oppeja voimme tuoda Kalevalasta nykypäivään?

■語句・文法

Eppinen taide ja luonto 「叙情詩的芸術と自然」は Gallen-Kallela 美術館が Kalevala と Gallen-Kallela に関連して行う企画／Kalevalasta kumpuaviin luonto-aiheiseen 「Kalevala から湧き出る自然の題材へ」(kumpuaviin [複入] < kumpuava 能現分 < kummuta 「湧き出る」、aiheiseen となっ
ていますが、おそらく複数入格の形は aiheisiin とすべきだと思います。)／sotka 「(カモ科の鳥) ハジロ、スズガモ」／käet 「カッコウたち」[複主] < käki／kotka 「鷲」／Tuonela 「冥界、冥府、あの世」／läsnä 「同席して、出席して、存在して」(Tuonelan joutsen 「Tuonela の白鳥」とは Kalevala に登場する、Tuonela の川を泳ぐ白鳥のこと)／ilmastonmuutos 「気候変動」／moni-muotoisuus 「多様性」／katoaminen 「消失」動名 < kadota／uhka-kuva 「怖ろしいイメージ、脅威的なシナリオ」／niistä kertovat tarinat ja kuvitukset 「それらについて語る話と絵」(kertovat 能現分 [複主] < kertoa)／heittää ilmoille 「投げかける、提示する」(ilmoille [複向] < ilma)／entis-aika 「以前の時代」／entäpä = entä 「～はどうか、そしてまた」／oppeja 「教訓を」[複分] < oppi

●フィンランド語理解のための訳例

Gallen-Kallela 美術館のプロジェクト「叙事詩的芸術と自然」は向ける|視線を|Kalevala から湧き出る自然の題材へ。ハジロ、カッコウ、そして鷲、さらに冥府の白鳥が存在している|Kalevala の詩の中にも|そして Akseli Gallen-Kallela の芸術にも。

気候変動と種の多様性の消失は|創り出す|怖ろしいシナリオを|将来について、|その中では Kalevala の物語の自然のうち|残っている|ただ、それについて語る物語と絵だけが。「叙事詩的芸術と自然」プロジェクトは投げかける|疑問を|<次のことに>関する|何を Kalevala は教えられるのか|我々に|自然について|そして、その意味について|以前の時代の人々にとって。そしてまた|どのような教訓を|我々はもたらすことができるのか|Kalevala から現在へ。

◎意訳

Gallen-Kallela 美術館のプロジェクト「叙事詩的芸術と自然」では、Kalevala から湧き出る自然という題材に注目を向ける。Kalevala の詩の中にも、そして Akseli Gallen-Kallela の芸術の中にも、ハジロ、カッコウ、鷲、そして Tuonela の白鳥が登場する。

気候変動と生物多様性の喪失は怖い未来像を創り出すが、そこでは Kalevala の物語に登場する自然のうち残されているのは、それについて語ってくれる物語と挿絵だけということになる。「叙事詩的芸術と自然」プロジェクトは、Kalevala が自然について、また自然が過去の人々にとって意味したものについて何を我々に教えてくれるのか、という問題を投げかける。そしてまた、我々は Kalevala から現代にどのような教訓をもたらすことができるのだろうか。

★補足

【1】では Oodi 図書館のために Kalevala を題材とした絨毯をデザインした Yrjölä さんの言葉を見ました。その Yrjölä さんの言葉の続きを読むと、やはり生物多様性に触れています。

【30】絨毯のデザイナー Sakke Yrjölä も生物多様性について述べている

Runoissa hirviöhauen kanssa taistellaan ja se tapetaan. Nykyisin miehisyyttä ei tarvitse todistaa verta vuodattamalla ja taruolentoja mestaamalla. Nyt haluan vain keskittyä kunnioittamaan vesiemme huippu-pedon komeutta ja ihastella sen kauneutta. Ymmärrän että suurilla pedoilla on erittäin tärkeä merkitys luonnon monimuotoisuuden säilyttämisessä omissa ekolokeroissaan. Vaikka hauki on ollut tärkeä ravinnonlähde ja se on yksi herkullisimmista kaloistamme, ei isoja yksilöitä kannata tappaa.

■語句・文法

hirviö-hauen「怪物のカワカマス」[属]< -hauki / miehisyyttä「男らしさを」[分]< miehisuus < miehinen < mies / verta vuodattamalla「血を流すことにより」(verta [分]< veri, vuodattamalla MA 不 [接]< vuodattaa < vuotaa) / taru-olento「神話上の生物、伝説上の生物」/ mestaamalla「首をはねることにより」MA 不 [接]< mestata / huippu-pedon「頂点捕食者の、上位捕食者の」(本文では huippu-peto となっているが、本来は huippupeto とすべきよう。その huippupeto とは、自分を捕食するものがないような生態系の頂点に位置するような生物、peto「獣」) / komeutta「美しさを、威厳のあるたたずまいを」[分]< komeus < komea / ihastella「称賛する」/ säilyttämisessä「維持することにおいて」動名 [内]< säilyttää < säilyä / eko-lokeroissaan「自らの生態的地位において、自らのニッチにおいて」[複内]+ 複 3 所接 < -lokero / ravinnon-lähde「栄養源」/ herkullisimmista「もっとも美味の」< herkullisin 最 < herkullinen < herkku

●フィンランド語理解のための訳例

詩の中では怪物のカワカマスと戦う|そして、それを殺す。現在では男性らしさを証明する必要はない|血を流すことにより|そして伝説上の生き物の首をはねることにより。今、私は望む|ただ集中す

ることに| [敬意を表することに| 我々の水域の頂点捕食者の威厳のある姿に] |そして [称賛することに| その美しさを]。私は理解する| 大きな獣には特に重要な意味がある| 自然の多様性を維持することに| 自らの生態的地位 (ニッチ) の中で。カワカマスは重要な栄養源だが| そして、それが我々のもっとも美味しい魚のうちの一つだが、| 大きな個体は殺す意味はない。

◎意訳

詩の中では怪物のようなカワカマスと戦い、そしてカワカマスは殺される。しかし今日では男らしさを証明するのに血を流すことや神話上の生き物の首をはねる必要はないだろう。今この絨毯をデザインするにあたり、私はただ、我々の水域において頂点に立つ捕食者の威厳ある姿に敬意を表し、その美しさを称賛することに集中したい。大型捕食動物は自らの生態的地位 (ニッチ) において、生物多様性の維持に非常に重要な役割を果たしていることを私は理解している。カワカマスが重要な栄養源であり、我が国においてもっとも美味しい魚の一つであるにしても、大型の個体を殺す価値はないだろう。

★補足

eko-lokero 「生態的地位、ニッチ」については、次のような説明が見つかります。

個々の生物種は、それぞれが周囲の環境を通して好適な生息環境を見いだしている。これを「ハビタット」とよび、同一ハビタットの中での競争の結果、生息・生育可能な落ち着き場所を探している。これを「生態的地位 (ニッチ)」という。(中山 2012: 18)

△引用文献:

中山智晴. 2012. 『競争から共生の社会へ—自然のメカニズムから学ぶ』北樹出版.

さて、それでは Kalevala の力も借りて生み出したいと考えられたフィンランド人たちの一体性、統合といったものは存在するのでしょうか。それについて読んで、この課は終わりということにします。

【31】Kalevala によって期待されたような国民統合というものは存在するのか？

Runsas puhe Kalevalan keskeisestä arvosta kansallisen yhtenäisyyden symbolina antaa ymmärtää, ettei tätä yhtenäisyyttä tosiasiasa ole ja sen puuttuminen koetaan erityisenä ongelmana. Voitaneenkin sanoa, että suomalaista yhteiskuntaa on määrittänyt ja määrittää edelleenkin kokemus kansan kahtiajaosta ja pelko sen uusista ilmenemismuodoista. Tämä kävi ilmi viimeksi vuoden 1994 EU-kansanäänestyksessä. Suomi poliittisena ja kansallisena yksikkönä ajatellaan kielen, historian ja kansallisen perinteen perusteella yhdeksi kokonaisuudeksi, hallitsevan etnis-genealogisen kansakunta-käsityksen mukaan jopa ”perheeksi” tai ”suvuksi”, mutta käytännössä erimielisyyksien sekä kieli- ja luokkaristiriitojen hajottamaksi. Kansallinen mytologia perustuu yhtenäisyyden ajatukselle, jota poliittinen todellisuus ei pettymykseksi näytä toteuttavan.

■ 語句・文法

Kalevalan keskeisestä arvosta「Kalevala の中心的な価値について」／kansallisen yhtenäisyyden symbolina「国民的統合の象徴として」／antaa ymmärtää「理解させる、示唆する」／tosi-asiassa「実際には」／puuttuminen「欠けていること」動名 < puuttua／koetaan「経験される、感じられる」受現 < kokea／voitaneen「できるかもしれない」[可]受現 < voida／määrittää「特徴づける、定義する」／kahtia-jaosta「二分について」[出] < -jako < jakaa／ilmenemis-muodoista「出現形態について」(ilmenemis- < ilmeneminen 動名 < ilmetä < ilmi、muodoista [複出] < muoto)／käydä ilmi「明らかになる」／kansan-äänestyksessä「国民投票において」[内] < -äänestys < äänestää < ääni／Suomi ... ajatellaan ...yhdeksi kokonaisuudeksi, ... ”perheeksi” tai ”suvuksi”, ... hajottamaksi「フィンランドは…一つのまとまりだと、…「家族だと」あるいは「一族だと」…バラバラにしたものだと考えられる」／hallitsevan etnis-genealogisen kansakunta-käsityksen perusteella「支配的な民族系譜学のネーション理解にもとづいて」(hallitsevan [属] < hallitseva 能現分 < hallita)／etnis-genealoginen「民族系譜学の」(genealoginen「系譜学の」< genealogia = suku-tutkimus)／eri-mielisyyksien sekä kieli- ja luokka-risti-riitojen hajottamaksi「意見の相違と言語対立や階級対立がバラバラにしたものだと」(eri-mielisyys「意見の相違」、luokka「階級、階層」、risti-riitojen「対立の」[複属] < -riita、hajottamaksi [変] < hajottama 動分 < hajottaa「バラバラにする、分裂させる」／pettymykseksi「残念なことに」[変] < pettymys「失望」< pettyä < pettää／ei näytä toteutuvan「実現しているようには見えない」(toteutuvan 能現 [属] [分構] < toteutua < tosi)

● フィンランド語理解のための訳例

[豊富な話は|Kalevala の中心的な価値についての|国民統合の象徴としての|]示唆する|[この統合が実際には存在しないことを|そして、それが欠けていることが感じられることを|特別な問題だと]。<実際には>言うことができるかもしれない|フィンランド社会を特徴づけてきたと|そして依然として特徴づけていると|[経験が|国民の二分についての|そして恐怖が|その新しい出現形態についての]。これは明らかになった|最近では|1994 年の欧州連合に関する国民投票の中で。フィンランドは|政治的な、そして国家的な単位として|考えられる|[言語、歴史、そして民族的伝統にもとづき|一つのまとまりだと]、|[支配的な民族系譜学のネーション理解によれば「家族であると」さえ、あるいは「一族であると」さえ]、|[しかし実際には意見の相違と言語対立や階級対立が分裂させたものだと]。国家的神話はもとづいている|統合の考えに|それを政治的現実には|残念なことに|実現しているようには見えない。

◎ 意訳

国民統合の象徴として Kalevala が中心的な価値をもつことについて多く語られるということは、この統合というものが実際には存在せず、それが存在しないということが特別な問題だと認識されていることを示唆している。実際のところ、フィンランド社会を特徴づけてきたものは、国民が二分されているという経験であり、それが新たに出現することに対する恐怖であったし、依然として今もそうなのである。このことは、最近では 1994 年の EU 加盟に関する国民投票において明らかになった。政

治的・国家的な単位としてのフィンランドは、言語、歴史、そして民族的伝統にもつづき一つまとまりだと考えられ、一方で支配的な民族系譜学的なネーション概念によれば「家族」あるいは「一族」とさえも考えられるが、しかし実際には意見の相違や言語対立・階級対立によって分裂を強いられたものだと考えられている。一つの国家としてのまとまりを形成しているといった神話は、国民が一つに「統合」されているという考えにもとづいているが、残念なことに、政治的現実はそれを実現してはいないようだ。

★補足

EU 加盟の是非を問う国民投票は 1994 年に行われました。投票率は 74%でしたが、そのうち加盟賛成は 56.89%、反対は 43.11%という結果が示すように、国民が二分されていることが明らかになったといえます。

▲出典

【1】【30】:

”Taide.” Oodi.

[<https://www.oodihelsinki.fi/mika-oodi/taide/>] (最終閲覧日:2023.06.04)

【2】【3】:

”Kalamytologiaa”. 2008. *Taivaannaula*.

[<https://www.taivaannaula.org/2008/10/16/kalamytologiaa/>] (最終閲覧日:2023.06.04)

【4】【6】:

”Kalevala”. *Suomalaisen Kirjallisuuden Seura*.

[<http://nebu.finlit.fi/kalevala/>] (最終閲覧日:2023.06.04)

【5】【10】～【19】【20a】【26】【31】:

Anttonen, Pertti & Matti Kuusi. 1999. *Kalevala-lipas*. Suomalaisen kirjallisuuden seura.

【5】253 ページ、【10】307 ページ、【11】308 ページ、【12】309 ページ、【13】313 ページ、
【14】310 ページ、【15】311 ページ、【16】311 ページ、【17】317 ページ、【18】309 ページ、
【19a】168 ページ、【19b】168 ページ、【19c】169 ページ、【20b】208 ページ、【26】318 ページ、
【31】317 ページ

【7】【25】【27】【28】:

”Kalevala ja eurooppalainen eeposperinne ennen ja nyt”. *Kalevalaseura*.

[<https://kalevalaseura.fi/kalevala-ehl/>] (最終閲覧日:2023.06.04)

【8】【9】:

”Suomalaisille rakas Kalevala”. *loydy*.

[<http://loydy.fi/suomalaisille-rakas-kalevala/>] (最終閲覧日:2023.06.04)

【20a】:

Elo, Tuulikki, Ilpo Probst & Päivä Virén. 2002. *Suomiopas*. WSOY. (126 ページ).

【22】【23a】:

Valkonen, Markku & Olli Valkonen. 1984. *Suomen ja maailman taide 3: Suomen taide Kultakausi*. WSOY.

【22】19 ページ、【23a】10 ページ

【21】【23b】:

JAPONISMI VISAVUORESSA.

[<https://www.visavuori.com/wp-content/uploads/2019/12/Japonismi-tiedote.pdf>].

(最終閲覧日:2023.60.04)

【24】:

”Suomi hakee Kalevalalle Euroopan kulttuuriperintötunnusta”. 2023. yle 2.3.2023.

[<https://yle.fi/a/74-20020612>] (最終閲覧日:2023.06.04)

【29】:

”Euroopan kulttuuriperintötunnus”. *Gallen-Kallelan Museo*.

[<https://www.gallen-kallela.fi/euroopan-kulttuuriperintotunnus/>] (最終閲覧日:2023.06.04)

 蛇足

Kalevala についての情報はそれこそいくらでもあると思います。たとえば、次のようなホームページが参考になるかもしれません。

・Kalevalaseura [<https://kalevalaseura.fi/>]

・”Matkalla Kalevalaan”. *Suomalaisen kirjallisuuden seura*.

[<https://matkallakalevalaan.finlit.fi/>]

また、犬を主人公にした Mauri Kunnas さんの絵本もおもしろいと思います。

・Kunnas, Mauri. 1992, 2006. *Koirien Kalevala*. Otava.

あるいは、Kalevala をモチーフにした Kalevalakoru「Kalevala アクセサリー」もすてきです。

Kalevala については話が尽きませんが、叙事詩や文学・芸術というものと、社会や政治の動きとい

うものとの関係は興味深いテーマです。その意味では、「私は社会系が専門だから文学・芸術はどうも…」とか、「私は文学は好きだけど政治には興味はないので…」とか言わないようにしなければいけないと常々思っています。なぜなら、文学も芸術も、そして政治や経済も人間の創造的な活動であるという点では、広い意味での「文化」に含まれるものだからです（「文化」の定義については、おそらくⅢ-4の資料の中で確認します）。もちろん、何もかも理解して、すべての分野で専門家のようにすることはできませんし、そのようなことをそもそもめざすべきでもないと思います。ただ、「社会系だ、人文系だ」、あるいは「理科系だ」といった分類に最初から縛られ、それを言い訳にしているのは、とてもフィンランドのことを理解することはできないだろうと思います。その意味で、自分の一番興味のあることに力を注ぎながらも、それが必ず別の事柄とつながっているはずだということも肝に銘じておくべきだろうと、偉そうなことを自分に言い聞かせています。